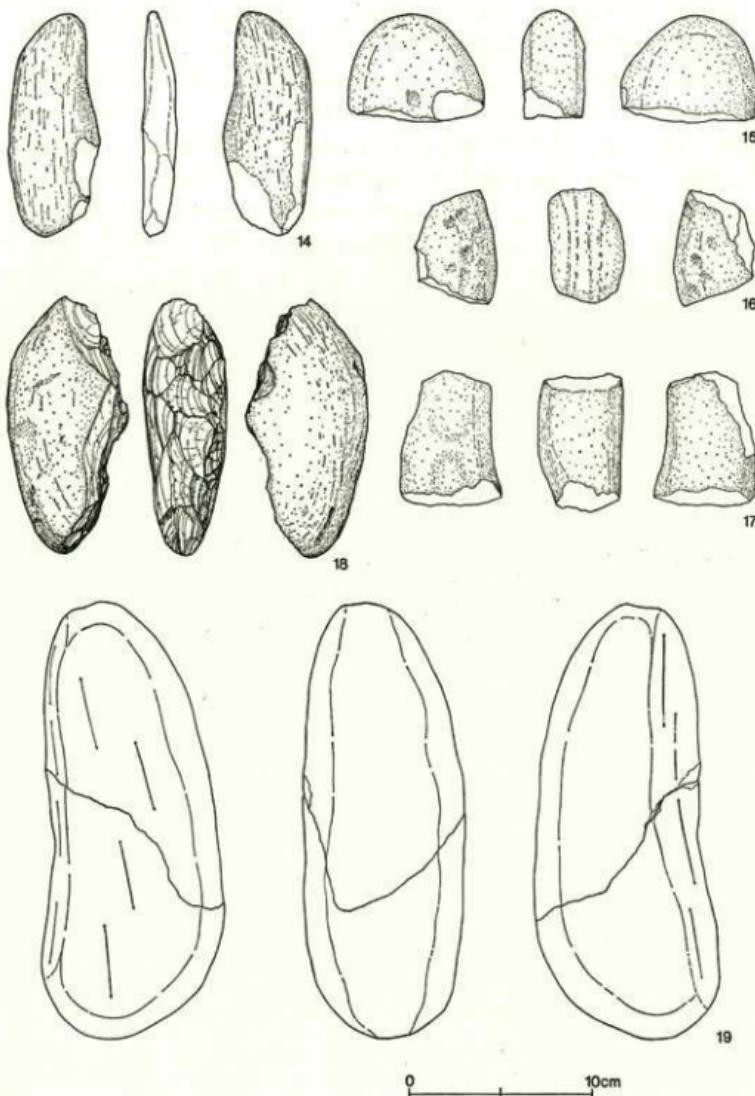


第74図 石 器 (1)



第75図 石器 (2)

E類 石核 (第74図12)

12は背面に平坦な面を持ち、横断面が舟底状を呈する。上下、左右から剥取されている。

G類 磨石 (第74図11、13、第75図14~17)

6点出土した。11は破碎されているが、一面に擦痕が観察される。13は断面カマボコ状の細長い砾であるが、平坦な面に擦痕が認められる。14は扁平な砾を利用しておらず、ほぼ全面に擦痕が認められる。特に先端部は、光沢を放つ程磨き込まれている。15、16は橢円形を呈する。所謂磨石である。両者とも破碎されている。17は側面の一面に擦痕が観察される。磨石はよく敲石と兼用される場合が多いが、この中で15にその痕跡が認められるものの、他には認められない。また、10、13、17は形状から言って磨石というよりも砥石的な用途が考えられる。

H類 砥器 (第75図18)

表張で1点のみ出土した。橢円形で表裏面が平坦な砾が利用されており、片側からのみの剥離によって刃部が形成される。丁度片手で握れる大きさであり、チョッパーのような用途が考えられよう。他の石器類とは様相が異なり、縄文時代中期の石器組成の中ではあまり見かけないものである。縄文時代でも古い時期の所産であろう。

I類 砥石 (第75図19)

19は平安時代の住居跡である第12号住居跡の、カマド付近から出土したものである。表面と側面に、金物を研いだ時に形成される様な面が観察される。中央部で割れている。

(金子 直行)

石 器 一 覧 表

番号	分類	出 土 地 点	縱 (cm)	横 (cm)	厚 さ (cm)	重 さ (g)	完存率
1	A	第1号住居跡	9.2	5.4	1.0	79	90%
2	A	H — 3	7.4	5.4	3.1	155	60%
3	A	第1号住居跡	9.2	3.4	1.4	70	90%
4	A	第2号住居跡	10.7	5.2	2.0	196	60%
5	A	F — 3	10.1	7.6	2.2	293	80%
6	A	I — 2	6.9	7.1	1.1	84	50%
7	B	第2号住居跡	8.7	3.6	1.7	106	100%
8	B	H — 1	3.2	1.7	0.6	6	100%
9	C	第2号住居跡	4.2	4.1	1.1	25	30%
10	D	第1号住居跡	5.9	3.5	6.6	20	100%
11	G	第2号住居跡	3.7	4.6	2.8	69	20%
12	E	第2号住居跡	5.3	4.2	3.0	72.5	100%
13	G	第1号住居跡	3.5	2.0	0.9	11	50%
14	G	第64号土壤	11.6	4.9	1.9	197.5	80%
15	G	第12号土壤	5.8	7.4	3.4	245	50%
16	G	第7号住居跡	6.1	4.4	4.1	131	30%
17	G	第2号住居跡	7.3	5.5	4.6	332	40%
18	H	表 採	14.0	6.5	4.6	512	100%
19	I	第12号住居跡	238	9.6	8.9	3285	100%

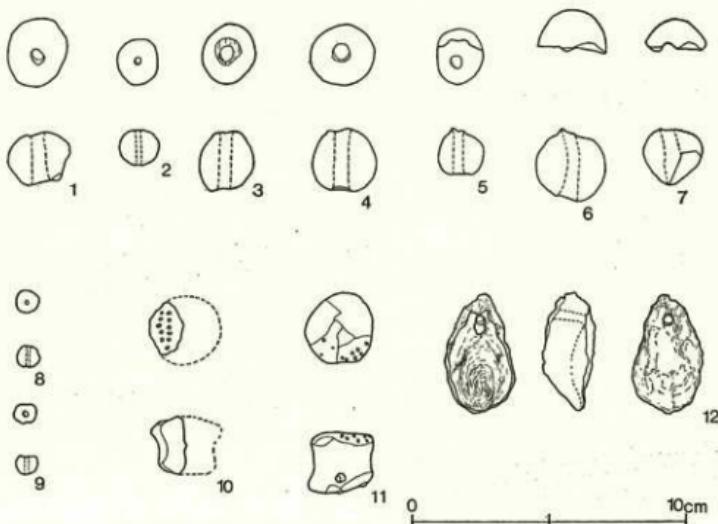
5 土 製 品

今回の調査で検出された土製品は、耳飾り、スプーン状土製品、土玉、羽口、鉄型である。羽口と鉄型は、本来土製品として分類されるものであるかどうか疑問の残るところであるが、広義の土製品と解し、出土量も少ないとことから、ここで一括して述べることにする。

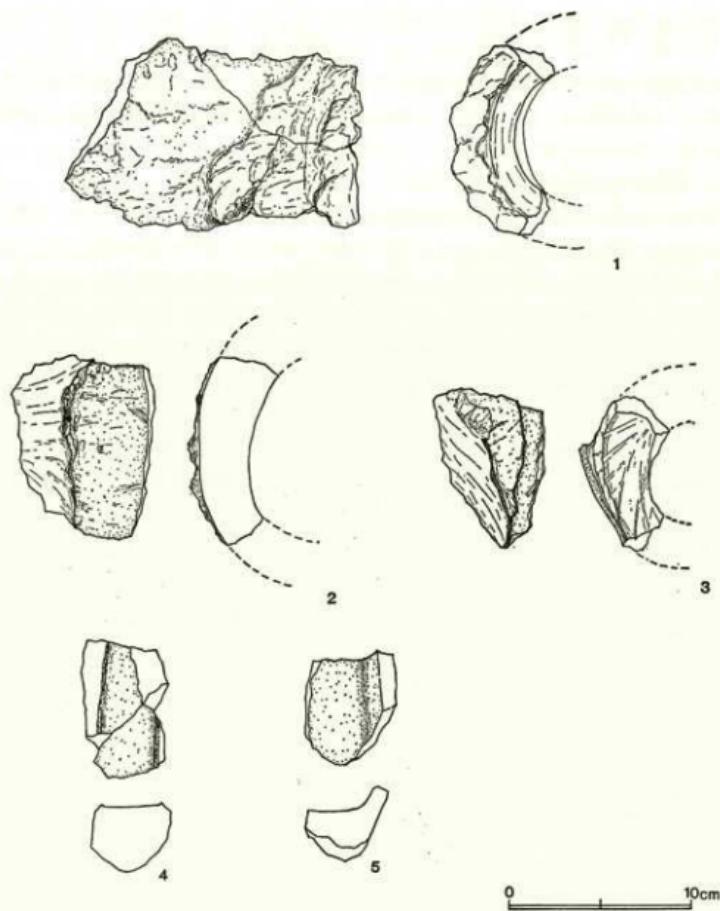
(1) 縄文時代の土製品（第76図10~12）

耳飾りは2点出土した。10は第5号住居跡から出土したもので、大半が欠損している。推定径は2.5cmを測り、厚さは約2cmを測る。上面と下面に丸棒状工具による小さな刺突が施される。刺突が規則的に施されているかは不明である。側面の中央部が括れ、鼓状の形態を呈する。11はJ-1区の第5号住居跡の周辺から出土している。全体的な形状はとどめるが、剥落等による部分的な欠損が著しい。上面の径は2.4cmを測り、厚さは2.2cmを測る。10と同様、上面と下面に丸棒状工具による小さな刺突が一面に施される。片面には、沈線が刺突の間をねって渦巻文状に施文されていた痕跡が認められる。側面部が緩く括れ、10と同様に鼓状の形態を呈している。この様に10と11は、大きさ、形態、文様施文等が近似し、出土地点も近いことから同一時期の所産と思われる。また、10が第5号住居跡より出土していることから、耳飾りは第5号住居跡出土土器の時期に比定される可能性が高いと思われる。

スプーン状土製品は1点のみ出土した。12はK-2区より出土したもので、遺構に伴ったものではない。全長4.4cm、幅2.6cm、厚さ2cmを測る。頭部には、直径3mm位の小さな穴が貫通する。粘



第76図 土製品 (1)



第77図 土製品(2)

土をこね合わせて、所謂スプーン状の形態を呈するが、裏側は舟底状を呈している。窪みの最深部は約8mmを測り、その部分の器壁は約1cmを測る。胎土に白色粒が含まれ、縄文式土器の胎土と類似する。焼成は良好であり、色調は赤褐色を呈している。

(2) 古墳時代の土製品、石製品 (第76図1~9)

土玉が8個と石玉が1個検出された。大半は住居跡から出土したものである。

1、2、8、9は第6号住居跡から出土したものである。1は完形品であるが、歪んでいる。2

はほぼ球形に近く、細い穴が貫通する。完形品である。8は小形の土玉で球形を呈し、完形品である。9は唯一の石製の玉である。扁球形を呈し、細い穴が貫通する、完形品である。第40図2の壺の覆土中から出土した。

3、4、5は第8号住居跡から出土したものである。3は細長い球形を呈し、穴の周辺部に平坦な磨きを施している。一部欠損している。4はほぼ球形を呈し、完形品である。5は扁球形を呈し、穴の周辺が盛り上がる。一部欠損している。6はやや大形の土玉で、半分を欠損している。穴は彎曲している。7は半分以上を欠損している。穴はやや広めに穿たれている。

(3) 平安時代の土製品(第77図1~5)

羽口と鉄型が出土している。いずれも第12号住居跡から出土したものである。羽口は細片の状態で多量に出土しており、形状の判断できるものを図示した。

1は先端部に鉄が付着している。推定外径約9cm、内径約5cmを測る。先端部の器壁は薄くなる。

2は比較的大形の羽口で、先端部に鉄が付着している。推定外径約11cm、内径約7cmを測る。

3は先端部に鉄が付着している。推定外径約7.5cm、内径約4.5cmを測る。

鉄型は破片で2点出土した。2点とも胎土等類似し、同一個体であると思われる。4は平坦な面が一面認められ、僅かに立ち上がりの部分が残る。5は平坦な面が二面残り、その角度は約60°を測る。

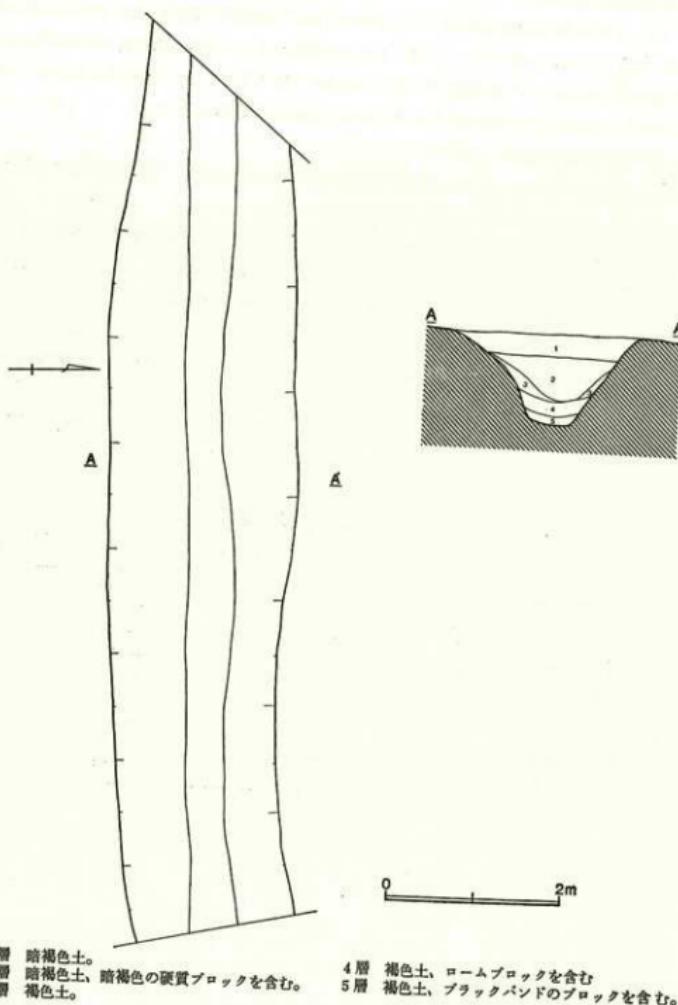
(金子 直行)

土玉一覧表

番号	出土地點	径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1	第6号住居跡	2.2	1.8	9	完形
2	第6号住居跡	1.5	1.4	4	完形
3	第8号住居跡	2.0	2.2	8	一部欠損
4	第8号住居跡	2.3	2.3	5	一部欠損
5	第8号住居跡	1.7	1.7	6	一部欠損
6	第6号土壙	2.5	2.4	8.5	半分欠損
7	G—2	2.1	2.0	5.5	半分欠損
8	第6号住居跡	0.9	0.8	1.5	完形
9	第6号住居跡	0.8	0.7	1	完形(石玉)

V 昭和54年度の発掘調査

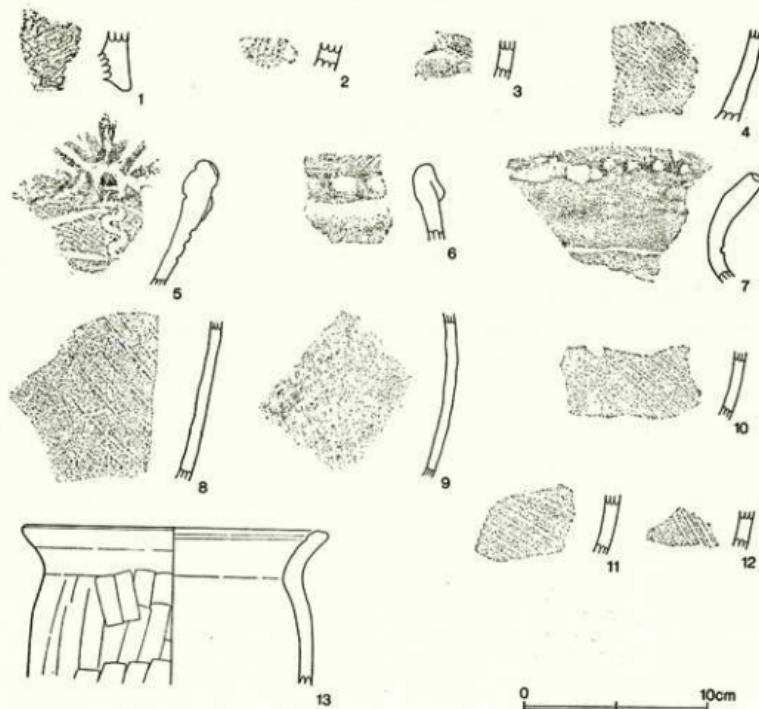
(県立高等看護学院体育館用地)



第78図 昭和54年度調査1号溝址

1 遺跡の概要

本遺跡は西側を細長い開析谷、東側を浅い谷によって囲まれた台地上に存在する大山遺跡の北東部に位置し、緩やかな斜面に面している。発掘調査は県立高等看護学院体育館建設に伴ない、昭和54年6月4日から6月15日に至る2週間にわたって実施された。調査範囲は約800m²、南北に長い方形を量する。検出された遺構は東西に直線的に走る溝1本であった。この溝は本調査区が昭和47年度、48年度にわたって実施された大山遺跡のG区（県立高等看護学院建設用地）とH区（県立高等看護学院関係宿舎建設用地）の中間地区に位置していることからG区、H区で検出された溝と同じ溝であることが判明した。また、出土遺物は縄文時代前期から晩期、古墳時代後期、中世近世の土器、陶器の小破片が少量出土したが、伴なう遺構の検出はなかった。また、調査区の南西コーナー付近ではG区同様、大山遺跡の製鉄遺構の所産とみられる鐵滓の断片も少量出土している。



第79図 昭和54年度調査出土土器

2 遺構と出土遺物

(1) 1号溝址（第78図）

調査区の東側を南北に走る溝で、昭和47～48年度調査のG区、H区で検出された溝と接続するものである。溝の幅は1.9～2.2m、深さ約1.1mを測る。「箱葉研」と呼ばれる断面形態の溝で、南側を緩傾斜、北側を急傾斜させて掘り込んでいる。溝底は南側が高く、北側はやや低くなっている。土層は基本的に暗褐色土を主体としており、下層にはロームブロック等が混入する。溝に伴なう出土遺物は覆土上層より中世から近世頃の陶器小破片が出土しているが、溝の上面は一部擾乱を受けしており、この溝の時期や性格を判断する資料としては十分とは言えない。

（星間 孝志）

(2) 出土土器（第79図）

今回の調査で検出された土器は少く、図示できるものは、第79図1～13だけであった。

1は上げ底状を呈する底部の破片である。胎土に纖維を含み、赤褐色を呈する。焼成は良好である。地文は不明瞭であるが、細かな繩文RLが施文されていたものと思われる。繩文時代前期黒浜式と思われる。

2は地文に撚糸Lが施文される小破片である。胎土に白色粒を多く含む。3は地文に繩文RLが施文される小破片である。4は底部付近の胴部で、細かな繩文RLが横位に施文されている。外面が赤褐色、内面が黒褐色を呈する。2、3は繩文時代中期、4が後期の所産と思われる。

5は波状口縁の精製深鉢形土器である。把手には3本の沈線が巡り、刻み目の施される瘤が貼付される。瘤の直下に蛇行沈線が垂下する。地文は細かな繩文RLである。

6は口縁部が折り返し状に肥厚し、指頭圧痕状の押捺が加えられる。7は口縁部が肥厚して外反する。括れ部には沈線が1本巡る。口唇部上には刻み目が施される。

8～12は同一個体と思われる。擦痕状の沈線が斜位に施文されている。胎土は緻密で、黒色の粒子が目立つ。焼成は良好で、暗赤褐色を呈する。5～12は繩文時代後期末から晩期にかけての所産と思われる。

13は口縁部が「く」の字状に外反し、若干肥厚する口縁が上を向く。口唇上と口縁の裏側に、浅い凹線が巡る。口縁部内外にヨコナデが施され、胴部にタテのヘラケズリが認められる。古墳時代後期末の所産と思われる。

（金子 直行）

IV 結 語

今回の調査で検出された造構は、縄文時代中期の住居跡 6軒、古墳時代の住居跡 2軒、平安時代の住居跡 5軒、土塹 105基であった。特に、縄文時代中期の住居跡は加曾利 E 1 式末葉～E 2 式前葉の所産もあり、比較的類例の少い時期にあって、貴重な検出例となっている。ここでは、以前行われた調査と今回の調査を合わせて、検討を行いたい。

1 大山遺跡の集落分析について

大山遺跡は縄文時代から平安時代にかけて、かなりの住居跡が検出されている。ここでは、縄文時代の住居跡を対象にして分析してみたい。以前の調査（谷井 1979）と今回の調査を合わせると、縄文時代の住居跡は16軒検出されたことになる。

しかし、全面発掘が成されたわけではなく、今後の調査によって住居跡数が増えることは予想される。幸い、今回の調査で6軒の住居跡を検出し、その配置から大山遺跡に於ける縄文時代中期集落の大まかなアウトラインを捉えることができた。

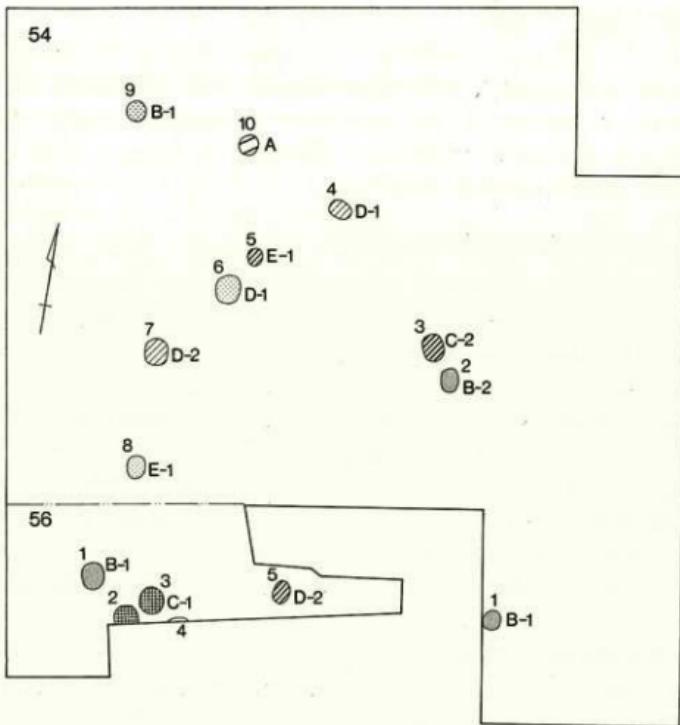
前回報告分と今回検出された住居跡の配置を合わせると、中央部に住居跡の構築されない空間を囲んで細長い環状に住居跡が分布していくことになる。（第1図）中央部は南北にやや細長い椭円形を呈し、南北約80m、東西約60mを測る空間部となっており、時期的にははっきりしないが土塹が構築されている。一部未調査区があるものの、今回の調査で中央部のおおよその範囲が確認されたものと思われる。

（1）個別住居跡の検討と類型化

最初に、個別住居跡の構造について検討してみたい。住居跡の構造を理解する上で問題になる点は、柱穴の本数及び配置や主柱穴と支柱穴の選別、炉の構造と位置、入口施設の想定、壁溝・埋甕の存否、特殊施設の構造の位置関係等であろう。そして、これ等の関連性として、住居跡内埋甕と炉を結んだ線上を住居跡の主軸線と想定し、埋甕部分を入口施設と想定する場合が多い。また、柱穴の本数と配置から上屋構造を推定し、住居跡にみられる様々な属生から得られる平面構造と合わせて、立体的空间的構造を分析しようとする研究も行われている。

ここでは、住居跡のプラン、柱穴の配置や深さ等から主柱穴と主軸を推定し、様々な角度から分析を行うことにする。ここで使用する主軸線という用語は厳密な定義の上で使用するものではなく、配置する柱穴間を理想的に左右二分割する中心線のことである。従って、從来炉と入口部付近に認められるという埋甕を結んだ線、またはその延長線上に存在する奥壁部の柱穴を結んだ線という概念（柿沼 1977、神村 1980）とは多少異なるものである。しかし、炉の位置や推定される入口部は、主軸線を想定するにあたって大きなウェイトを占めている。尚、昭和54年度報告の住居跡は54-1号住…、今回調査の住居跡は56-1号住…と表記したい。また、56-4・13号住は分析の対象からはずすことにする。

54-1号住（第2図3）は主柱が5本の住居跡と思われる。 P_1 と P_3 、 P_4 の中間点を結んだ線



第1図 住居跡分布図

が主軸になる。主軸を中心として左右対称の位置に柱穴が配置される。炉は主軸上にあり中央部より北側に位置する。入口部は P_3 、 P_4 の間と推定される。部分的に壁溝が巡り、壁柱穴が何箇所かにみられる。

54—2号住（第2図4）は主柱が5本の住居跡と思われる。 P_1 、 P_5 の中間点と P_3 を結んだ線が主軸である。主軸を中心として左右対称の位置に柱穴が配置される。炉は主軸上にあり、中央部より北側に位置する。入口部は P_3 の周辺と思われる。

54—3号住（第2図10）は主柱が6本の住居跡と思われる。 P_1 、 P_6 の中間点と P_3 、 P_4 の中間点を結んだ線が主軸である。主軸を中心として左右対称の位置に柱穴が配置される。入口部は P_3 と P_4 の間と推定される。

54—4号住（第2図13）は主柱が7本の住居跡と思われる。 P_1 と P_4 、 P_5 の中間点を結んだ線が主軸であり、主軸を中心に左右対称の位置に柱穴が配置される。炉は主軸線上にあり、ほぼ中央部

に位置する。住居跡プランからすると入口部は P_4 と P_5 の間が推定される。

54—5号住（第2図11）は主柱が8本の住居跡と思われる。 P_1 と P_8 を結んだ線が主軸であり、主軸線を中心として左右対称の位置に柱穴が配置される。炉は土器囲い炉で主軸線上にのらず、大きく東にずれる。主柱の構造からすると入口部は P_5 周辺と思われるが、炉の位置からすると P_5 の周辺が考えられる。住居跡の長軸に主軸をとるが、空間分割は短軸を中心に行われているようである。

54—6号住（第2図5）は主柱が7本の住居跡と思われる。 P_1 と P_4 、 P_5 の中間点を結んだ線が主軸となる。主軸線を中心としてほぼ左右対称の位置に柱穴が配置される。炉は主軸線上中央部や北寄りに位置するものの、炉の中心は主軸よりずれる。入口部は P_4 と P_5 の間と思われる。

54—7号住（第2図14）はプランに沿って柱穴がほぼ円形に並ぶが、深さや位置関係から主柱が7本の住居跡と思われる。 P_1 、 P_7 の中間点と P_4 を結んだ線が主軸となり、主軸線を中心して左右対称の位置に柱穴が配置される。炉は主軸線上ほぼ中央部に位置する。入口部は P_4 の周辺と思われる。

54—8号住（第2図6）はプランに沿って柱穴が8個並ぶが、柱穴間の距離は一定ではない。主軸のとりかた二通りが考えられる。一つは、 P_1 と P_8 を結んだ線を主軸とするものである。主軸線が少しねじくれるが、ほぼ左右対端の位置に柱穴が配置される。この場合炉は主軸線上にのらず、入口部は P_5 の周辺に推定される。二つは、 P_1 、 P_8 の中間点と P_4 、 P_5 の中間点を結んだ線を主軸とするものである。主軸線を中心として左右同数の柱穴が配置されるが、柱穴間の距離は一定せず歪んだ形になる。しかし、炉は主軸線上にのり中央部より北寄りに位置する。入口部は P_4 と P_5 の間と推定される。

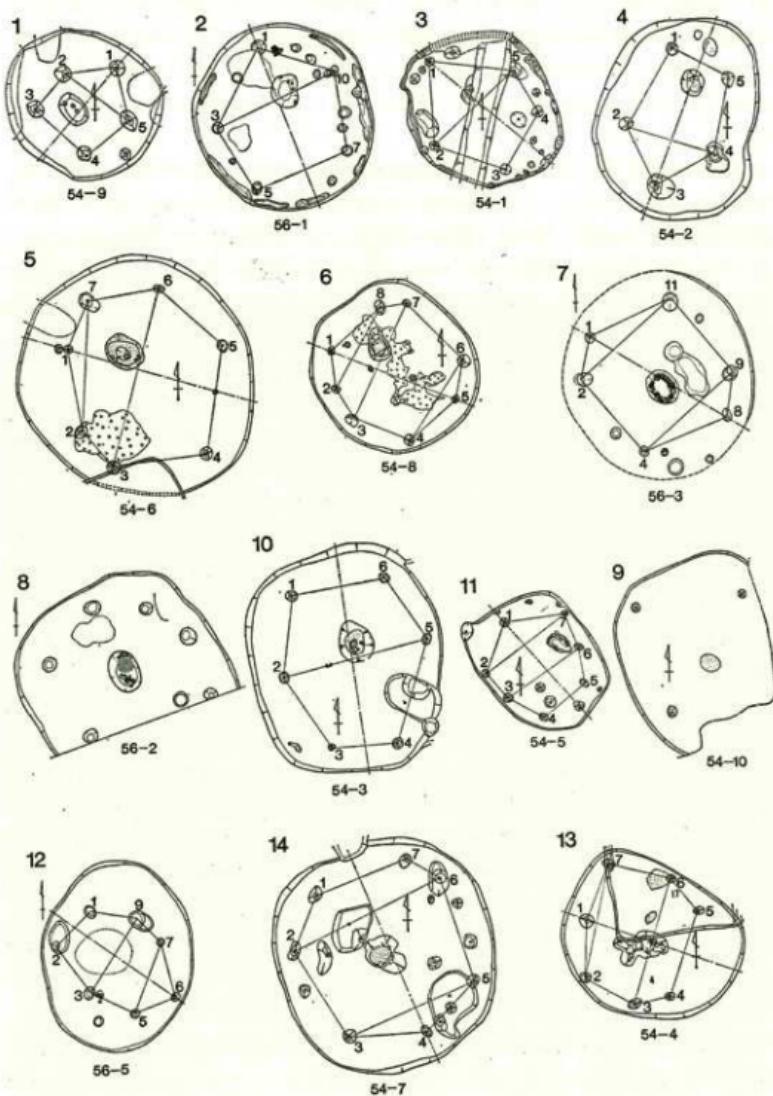
54—9号住（第2図1）は主柱が5本の住居跡と思われる。 P_1 と P_4 、 P_5 の中間点を結んだ線が主軸となる。炉は主軸線上ほぼ中央部に位置する。入口部は P_5 と P_4 の間と思われる。

54—10号住（第2図9）は主柱が4本の住居跡と思われる。住居跡の長軸が主軸になるものと思われる。

56—1号住（第2図2）はプランに沿って柱穴が巡る。柱穴の深さ、間隔等から主柱は5本と思われる。 P_1 と P_8 、 P_7 の中間点を結んだ線が主軸となる。主柱穴間にそれぞれ補助柱穴と思われるものがみられる。主軸線を中心として左右対称の位置に柱穴が配置される。炉は主軸線より東にわずかにそれるが、中央部よりやや北寄りに位置する。部分的に壁溝が認められる。入口部分は P_5 と P_7 の間に推定される。

56—2号住（第2図8）は未調査部分があるため全体の構造は不明である。しかし、調査部分から検出された柱柱穴の配置から推定すると、主柱は7本か8本が考えられる。炉は住居跡の長軸方向に細長く、土器囲い炉である。主軸は住居跡の長軸方向にあるものと推定される。

56—3号住（第2図7）は柱穴がほぼ円形に並ぶが、主柱は推定し難い。同様な深さの柱穴を巡ぶと P_1 、 P_2 、 P_4 、 P_6 、 P_8 、 P_{11} の6本主柱が考えられ、 P_2 、 P_4 、 P_6 、 P_{11} はほぼ等間隔で対称な位置にあるが、 P_1 、 P_8 の位置がずれる。 P_1 と P_8 を結んだ線を主軸とすると、炉は主軸線上ほぼ中央部に位置する。入口部は P_8 周辺に推定される。また、炉の長軸方向と住居跡のプランを考



第2図 住居跡類型図

慮すると P_1 , P_{11} の中間点と P_4 , P_5 の中間点を結んだ線を主軸とすることもできよう。主軸線を中心にして対称の位置に柱穴が配置されるが、対応する柱穴が不揃いであり、 P_1 と P_{11} , P_2 と P_{10} は大きさ深さともに異っている。いずれにしても P_5 に埋甕状の土器が存在していたことからこの住居跡の入口部は P_4 と P_5 , P_4 の間に推定される。

56—5号住（第2図12）は主柱が7本の住居跡と思われる。 P_1 , P_2 の中間点と P_6 を結んだ線が主軸になる。擾乱部に焼土が好在したことから炉は擾乱内にあったものと思われ、主軸線上にある。住居跡のプランと柱穴の位置がずれるが、住居跡の短軸を主軸にする構造のものと思われる。入口部は P_6 の周辺に推定される。以上の分析から以下の様に分類することができる。

Aタイプ、4本主柱のもの。1軒。（54—10号住）

Bタイプ、5本主柱のもの。4軒。

1. 奥壁部を頂点とする5角形を呈するもの。（54—1, 9号住, 56—1号住）

2. 入口部を頂点とする5角形を呈するもの。（54—2号住）

Cタイプ、6本主柱のもの。2軒。

1. 4柱穴を基本とし、主軸線上両側に柱穴が存在するもの。（56—3号住）

2. 主軸線を中心として左右対象位置に柱穴が存在するもの。（54—3号住）

Dタイプ、7本主柱のもの。4軒。

1. 主軸線上奥壁部と、主軸線を中心として左右対象位置に柱穴が存在するもの。（54—4, 6号住）

2. 主軸線上入口部付近と、主軸線を中心として左右対象位置に柱穴が存在するもの。（54—7, 56—5号住）

Eタイプ、8本主柱のもの。2軒。

1. 主軸線上両端と、主軸線を中心として左右対象位置に柱穴が存在するもの。（54—5, 8号住）

2. 主軸線を中心として左右対象位置に柱穴が存在するもの。（主軸線の想定方向をかえれば、54—8号住, 56—3号住が該当する可能性を有する。）

（2）類型的構造的検討

以上、かなり雑然と柱穴が配置すると感じられる住居跡についても、ある中心線を求めるこによって、ほぼ左右対称の位置に柱穴を見い出すことができる。住居跡の構造は、基本的に3本及び4本の柱によって囲まれる、三角形・四角形・台形の各パートで構成される複合形態であると解釈すれば（横本 1976）、1本及び2本主柱の特殊形態の住居跡を除くと、「ある中心線を求めるこによって左右対称形の柱穴配置が考えられる。」のであるこではある中心線に対して、主軸という用語を用いた。この主軸は上屋構造に対する主軸であり、住居跡の使用空間に対する主軸ではない。しかし、この主軸が生活空間の主軸と同一になる場合もあるであろうし、まったく別な生活空間の主軸が存在することもありうるであろう。

では、住居跡における柱穴の位置はどの様に決定されるのであろうか。神村透氏は下伊奈地方の繩文中期後半の住居跡に対して、次の様な構築方法を考察している（神村 1980）。要約するとま

す、①中心を決め、網を使って円をかき、それをもとにプランを決める。②掘り下げが進むと、当初からきまっていた主軸線を引き、入口と奥をきめる。入口にはピットまたは埋甕を設け、中心がそれより奥に方形の石囲い炉をつくっている場合が多い。③主軸の中心を通り、直交するBを引く。この二本が柱穴配置の基準となり、直角に基に二等分割を繰り返して柱穴の位置をきめる。中期後半の主柱穴は四主柱か六主柱のいずれかであり、中心角の四・八・十六等分割線上のいずれかに配置している、ということになるであろう。ここで重量な点は、設定される主軸が上屋構造及び生活空間に共通することであり、主軸が生活空間分割に強い規格制を与えていていることである。

また、渋谷文雄氏は住居跡の平面形態と柱穴の位置から、千葉県にみられる住居跡の復原的考察を行っている（渋谷 1982）。要約すると、炉を中心として夾角の等しい放射状基準線を設定すると、主要な柱穴がそれに接する位置にあり、しかも、炉からほぼ等距離に存在する。この関係は平面形態に関係なく対応し、楕円形住居跡等は円形住居跡の周壁が一方向に張り出した形態と考えられ、円形部と張り出し部に分けて考えることができ、炉は円形部の中央に位置する、ということになるであろう。ここでは、炉を中心に平面の規格性が存在することに注意したい。また、住居跡の規模と主柱穴数に一定の関係があり、主柱が一本増すことにより住居跡の規模が増すことも指摘している。

大山遺跡では、炉がほぼ中央部に存在する住居跡は54—4、7、10号住、56—3号住である。他の住居跡では中央より北寄りに炉が位置し、54—5号住は主軸から大きくなれて存在している。確かに、炉が中央部に位置する住居跡では主要な柱穴は炉からほぼ等距離に存在し、主軸との関係からすれば放射状の等分角の位置関係にあることが理解できる。典型的な例では54—7号住があげられよう。また、54—3号住は楕円形のプランを呈し、炉を中心とした円形部と張り出し部で構成されている住居跡として理解することもできる。

しかし、これ等の典型的な住居跡の他に、主軸、炉、柱穴との間に一定の関連性が窺えない住居跡も存在している。54—6、8号住、56—2、3号住は主軸線を想定しても、柱穴は理想的な対象形とはならず、柱穴間の距離にバラツキがみられる。また54—5号住にみられる炉の位置関係等から、炉を中心にして住居跡の規格性が存在していたと思われないものもある。

この様に大山遺跡では、神村、渋谷両氏の見解で理解しきれない住居跡が少なからず存在することになる。しかし、主軸と炉の関係に規格性のない住居跡においても、上屋構造に対する主軸という概念からでは柱穴がほぼ左右対象というという規格性が廻われるのである。

Aタイプの住居跡は54—10号住の1軒のみであり、完全な形を止めていないので詳細は不明である。遺存部分からすると、炉がほぼ中央にあり菱形状の4本柱穴の配置が考えられる。

Bタイプの住居跡では、4本主柱を中心として奥壁部に柱穴が存在するB—1と、入口部付近に柱穴の存在するB—2タイプが存在する。E—1タイプは、奥壁部の柱穴周辺に配石が認められたりすることから、祭壇的な機能が想定されたり、B—2タイプの入口部付近の柱穴は、埋甕が抜き去られた後の痕跡である可能性があるとの指摘がなされている（柿沼 1977）。しかし、大山遺跡では埋甕が歴然として設置されている住居跡はなく、柱穴の規模等は他とあまり変りないのである。これは住居跡の上屋構造に関連する柱穴であると思われ、この柱穴に対して揃持柱的な性格

を考えておきたい。54—9号住は主要な4本柱のほぼ中央に炉が位置する。54—1号住と56—1号住は柱穴間にできる三角形と四角形の合わさる部分、もしくは三角形内に炉が位置し、住居跡全体からすれば中央部より奥に位置している。また、両住居跡は壁溝が部分的に巡り、構造的にも非常に類似している。54—2号住はE—2タイプであるが、炉はかなり奥壁部に位置している。以上、Bタイプの住居跡は、54—9号住を除いて、炉を中心として柱穴の配置が決められていたものとは理解し難く、むしろ主軸と柱穴を基準とする平面分割の規格性が窺われる。

Cタイプは、4本柱を基本とし主軸線上両端に柱が存在するC—1タイプと、主軸線を中心として左右対称位置に柱が存在するC—2タイプがある。C—1タイプである56—3号住は4本柱で囲まれる四角形の部分と、奥壁部と入口部付近にできる三角形の部分が組み合わさった構造となっている。炉は四角形の主軸線上ほぼ中央部に位置し、住居跡全体からしてほぼ中央部となる。この点からすれば、Aタイプである54—10号住、B—1タイプである54—9号住と類似する。C—2タイプである54—3号住は、4本柱によって囲まれる台形が2つ合わさった構造を持ったのであり、炉は奥側の台形の中で主軸線上にある。やはり、主軸線を中心とした規格性が窺われる。

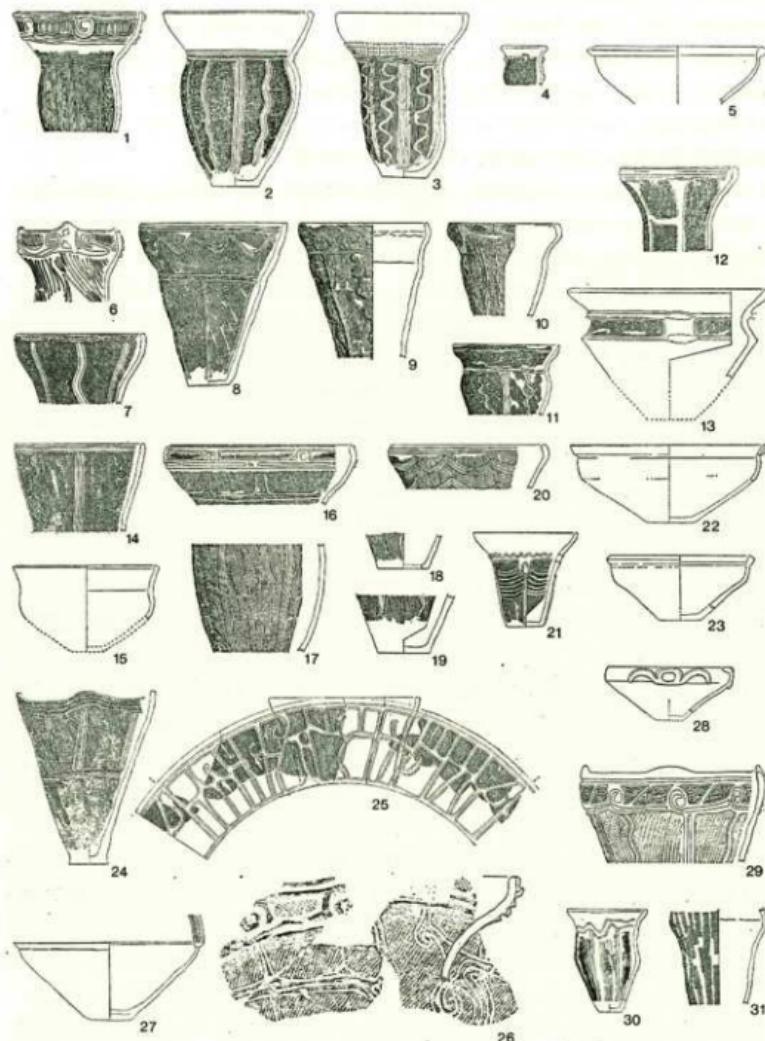
DタイプはC—2タイプの主軸線上奥壁部に柱穴を有するD—1タイプと、入口部付近の主軸線上に柱穴を有するD—2タイプが存在する。D—1タイプの54—6号住では、炉は主軸線上から少しはずれるが、住居跡全体からすれば中央部より奥に位置している。そして、4本柱に囲まれる2つの台形の奥側に炉が位置することになる。54—4号住では、柱穴配置内からすれば炉はやや手前に位置するが、住居跡全体からすればほぼ中央部に位置する。D—2タイプの56—5号住では、搅乱内に炉があったとすれば、炉は主軸線上にのり、奥側の台形内に位置するものと思われる。54—7号住は、主軸線を中心として整った対称形を成す。炉は主軸線上中央部に位置し、手前側の四角形に位置する。

EタイプはCタイプの主軸線上両端に柱穴が存在するものである。54—8号住は主軸線がねじれ整った左右対称形とはならない。炉は主軸線上にはのらないが、奥側の台形内に位置している。54—5号住は主軸線を中心として左右対称形を成すが、炉は主軸線より大きく東側へそれる。上屋構造の主軸線に対して、生活空間の主軸線が直交する形で存在していたとすれば、炉は生活空間主軸上の奥側に位置していたことになる。

以上の分析から得られたことは、上屋構造の主軸と生活空間の主軸が少しずれたり直交したりして必ずしも同一にならない住居跡が存在すること、また、柱穴の本数にかかわりなく、炉が中央部に位置するものと奥側に位置するものとが存在することである。そして、炉の位置から柱穴の位置関係が決められたと思われない住居跡も存在することである。

(3) 住居跡出土土器と各類型との関連

それでは次に、出土土器との関連から検討してみたい。出土土器の古いと思われる順に住居跡を並べたものが第2図であり、同段階の住居跡は番号順に並べてある。また、出土土器は住居跡番号順に第3図に示した。住居跡の時期決定は埋設土器が少なく、覆土出土土器から推定せざるを得ない。ここでは、覆土出土土器と住居跡とが時間差を持つものの近接しているものとして捉えた場合、住居跡の各類型と出土土品がどの様な関係にあるかを検討したい。



1 (1号)、2～5 (2住号)、6～11 (3住号)、12, 13 (4住号)、14, 15 (5住号)、16, 23 (6住号)、
24, 25 (7住号)、26, 27 (8住号)、28 (9住号)、29～31 (10住号)

第3図 昭和54年度報告住居跡出土土器

加曾利E式】古段階…54—9号住（B—1）、加曾利E】式末葉～E】式初頭段階…56—1号住（B—1）、54—1号住（B—1）、54—2号住（B—2）、54—6号住（D—1）、54—8号住（E—1）。

加曾利E】式古段階…56—3号住（C—1）、56—2号住（?）

加曾利E】式中段階…54—10号住（A）

加曾利E】式新段階…54—3号住（C—2）、54—5号住（E—1）、56—5号住（D—2）

加曾利E】式末～E】式初頭段階…54—4号住（D—1）、54—7号住（D—2）

以上、出土土器により6段階の変遷を考えてみた。それ等の段階的な遺構の特徴をまとめてみる。

加曾利E】式古段階の住居跡は1軒しか検出されていないが、5本柱のBタイプである。炉は4本柱に囲まれた中央部に位置する。

加曾利E】式末～E】式初頭段階では、5本柱のB—1、2タイプと7本のD—1タイプ、8本のE—1タイプが存在する。56—1号住はこの段階の中にあっても若干古い様相を持ち土器群が出土している。しかし、加曾利E】式に比定したとしても、その末期に位置付けられるものであろう。54—1号住は56—1号住と類似した構造を持ち、54—1号住出土土器（第3図—1）は54—2号住出土土器（第3図—3）と、頸部懸垂文や条線の施文方法等酷似している。この3軒の住居跡は主柱が5本であること、炉が柱穴によって区画される三角形内でその線上にあり、B—1タイプでも奥に位置している点で共通性がある。おそらく、同段階に存在していた住居跡で、出土土器から加曾利E】式末からE】式初頭段階への移行期に構築されたものと思われる。

また、Bタイプの他にD—1'E—1タイプが存在する。D—1である54—6号住は、三角形と二つの台形のバーツから構成される。奥側の三角形と四角形の部分をB—1タイプの三角形部分と比較すると、前者は後者の二等辺の中間に柱を1本づつ加えた形となり、炉はB—1タイプと同じ場所に位置していることになる。そして、手前側の台形は、B—1タイプの台形と同様に広い空間となっている。このことは、E—1タイプである54—8号住についても同様に言える。54—8号住は入口部付近に柱を1本加えた形となるが、54—6号住にも小さな柱穴がみられ、両住居跡が類似していることが理解される。また、両住居跡とも炉の中央部に主軸が通らず、若干ずれている点も共通性がある。54—6号住出土土器（第3図16）と54—8号住出土土器（第3図26）は幅の狭い口縁部文様帯と頸部文様帯の区画のあり方が類似している。住居跡構造と出土土器から、両住居跡は同段階に存在していたものと思われる。

しかし、この段階にあってBタイプの住居跡D、Eタイプの住居跡が同一時期に存在していたかどうかは、出土土器からでは判断がつかない。54—9号住では確立された連弧文土器（第3図20）が出土しており、その影響を受けた土器（第3図16、21）もみられる。54—1号住、2号住からは連弧文土器は出土していない。たまたま廐棄時に、この器種が欠落していたとも考えられ、当地域に於ける連弧文土器出現期の様相が明らかになるまでは両者の比較は困難であろう。この段階に於けるB、D、Eタイプの住居跡は同時期のバラエティーとして包括される可能性もあるが、ここではD、EタイプをBタイプからの変化形態として捉え、そこに僅かでも時間差を考えておきたい。

加曾利E II式古段階では、56—3号住がC—1であり、炉が中央部に位置する。56—2号住はタイプは不明であるが、炉は中央より奥側に位置するものと思われる。炉の位置に二通りが存在する。56—3号住の主軸線のねじれは、前段階との関連性が窺われる。両住居跡は隣接しており、出土土器等を比較しても若干の時間差が予想される。

加曾利E II式中段階の住居跡は54—10号住の1軒であり、4本柱Aタイプで炉が中央に位置する。出土土器第3図29は4単位の突起状の波状口縁で地文に撚糸を施し、隆帯の懸垂文を垂下している。キャリバー形の崩れた形を呈し、この種の波状縁を持つ土器は加曾利E II式の新しい段階に多くみられるが、下南原遺跡（鈴木 1981）では古い段階の土器にもみられる。隆帯の懸垂文はE II式の新しい段階である坂東山27号住出土土器（谷井 1973）にもみられる。第3図30の土器の地文は繩文と条線であり、この手法は秩父山遺跡32号住（金子 1978）出土の加曾利E II式の新段階の土器にみられる。54—10号住は第3図29の口縁部文様帶の崩れ方から、加曾利E II式中段階でも新段階に近いか、もしくは新段階への移行期に位置付けておきたい。

加曾利E II式新段階では、C—2、D—2、E—1タイプが存在する。いずれも、主軸を中心として柱穴は整った対称形を成す。炉は54—3号住、56—5号住とも奥側の台形内に位置する。54—5号住の炉も、生活空間内では奥側に位置していたものと思われる。

加曾利E II式末～E III式初頭段階では、D—1、D—2タイプが存在する。柱穴の配置は異なるが、主軸を中心として整った対称形を成し、炉は中央に位置している。両住居跡出土土器は、志久遺跡（笠森 1979）でみられる様なキャリバー形土器の系譜を引く土器、波状文の施される土器等は含まれず直接対比することは無理であるが、両耳壺の祖形的な第3図13や区画文を持つ第3図25等から加曾利E III式段階に比定される可能性が高いと思われる。

（4）大山遺跡に於ける集落変遷

以上述べたことを、住居跡の時期的な構造上の推移と、空間分布についてまとめてみたい。加曾利E I式古段階では、5本柱で中央に炉を持つ住居跡が1軒集落の北端に位置している。その後、住居跡の構築はとぎれ、加曾利E I式末～E II式初頭段階になって住居跡の構築が始まる。この段階の住居跡は5本柱で中央より奥に炉を持つものと、7～8本柱でやはり中央より奥に炉を持つものとが存在する。後者の柱穴配置はあまり整っておらず、前者からの変化形態と捉えられるならば、両者の間には時間差が推察される。5本柱の住居跡は中央の空間部を挟んで、東側に2軒西側に1軒分布する。7～8本の住居跡は西側に2軒分布する。加曾利E II式古段階では6本柱で中央部に炉が位置する住居跡と、全体形は不明であるが炉を奥に持つ住居跡とが存在する。前段階と同様に柱穴の配置はあまり整っていない。住居跡は集落の西南部に分布している。加曾利E II式中～新段階では、4本柱で炉を中央部に持つ住居跡が1軒、集落の北端に位置する。加曾利E II式新段階では6本、7本、8本柱の住居跡が存在し、柱穴の配置はそれ以前より整った左右対称形となる。しかし、炉はいずれも住居跡の中央部より奥に存在している。住居跡は中央の空間部を挟んで北側に2軒南側に2軒対峙する様に分布している。加曾利E II式末～E III初頭段階では、7本柱の住居跡でいずれも炉を中央部に持つ住居跡が存在し、柱穴の配置も整っている。住居跡は集落の北側に2軒分布している。

この様に、大山遺跡の集落は何段階かにわたって住居跡が構築され、その結果として細長い環状の集落形態ができあがったものである。また、未調査区が存在し集落の全貌を明らかにしたとは言えず、今後ブランクを埋める住居跡が検出される可能性も残されている。しかし、今まで検出された住居跡からでは、加曾利E I式古段階と加曾利E II式末からE III式初頭段階の間に、大きなブランクが存在する。また、加曾利E II式期内にあっても中段階の様相が不明瞭であり、住居跡が継続的に構築されていたとは断言できないであろう。むしろ出土土器からでは、断続的に集落が形成されたものと思われる。

大山遺跡の集落分析から、住居跡の構造上の差異と出土土器の段階上の時間差とかある程度符合することが理解された。しかて、大山遺跡でのあり方が同時期すべての集落にあてはまるというわけではない。加曾利E I式からE II式期の住居跡形態では、5本柱の住居跡は西部地域に、4本、6本柱の住居跡は東部地域に多くみられる傾向にあり、大山遺跡の乗る大宮台地周辺では両者が混在する傾向にある。特に、大宮台地では加曾利E II式期の住居跡は、ローム面に浅く掘り込まれ柱穴が多くなり全体的に貧弱な様相を呈する様になって、加曾利E I式期との間に住居跡の構造上の変化が窺われる所以である。大山遺跡の住居跡はこの間の事情を物語っているものと思われる。今後、他地域及び周辺地域との比較検討の上、この間の様相を明らかにして行かなければならぬであろう。

最後に住居跡出土土器について触れておきたい。今回検出された住居跡の遺物分布状態をみると、床面に接しているものや床面近くから出土しているものも存在し、平面的にはほぼ一面に分布していた。住居跡は浅いためとも思われるが、第一次堆積層が薄く、完形品が多數出土するという所謂吹上パターンと称される状態を呈するものではなかった。第3号住居跡では覆土から多数の土器片が出土しているが、完形品及びそれに近いものは殆んどなく、図示できる大形破片は床面から近い位置で出土した。

小林達雄氏が吹上パターンを提唱（小林 1965）して以来、遺物の出土状態に対して各種パターンの類型化と検討（可見 1969、樋口 1972、小林 1974、末木 1975、1977、桐原 1976、石井 1977、山本 1978、他）が行われてきた。問題となる点は、第一次堆積層の生成要因と出土土器の性格である。住居跡が機能を停止してから埋まりきるまでには様々な過程が存在したものと思われ、单一原理で律しきれない複雑な様相が窺われる。住居跡に於ける一括出土土器の存否、量、位置、住居跡付属土器と覆土出土土器に於ける時間差の検討、第一次堆積層及び他の層に於ける生成要因の識別等を個別住居跡に対して検討し、住居跡の相互比較、集落内での位置付け、集落の性格付けを分析した上で、あらためて各パターンが何を意味しているか再吟味していく必要がある様に思われる。

集落論を開拓するにあたって住居跡の同時性を立証することが、一番の基本事項である。長崎元広氏は集落研究を系統的に総括し展望を述べる中で、現在開拓されている集落論の方法と基準に対して、再検討の必要を説いている（長崎 1980）。集落論の方法と基準を設定するにあたって、土器廃棄論は回避できない問題である。

客観性の乏しい恣意的な資料操作に終始してしまった恐れが、残るが大山遺跡の集落分析は、住

居跡の様相から覆土出土土器と住居跡に近接した時間差を想定し、住居跡の構造上の差異との比較から、集落内に於ける同時性を検討しようと試みたものである。興味ある結果が得られた。これでいかに解釈していくかは今後の課題であり、細かい分析を通して地域的、時期的な様相を検討していかなければならないであろう。

上記各氏の商業論、移動論、分割構造論（円羽 1978）等には触れ得なかった。機会を改めたい
(金子 直行)
と思う。

2 土壌について

検出した土壌について、いくつかの視点を設け観察を行った。その結果と、発掘時の所見を記述し、まとめとしたい。

平面形態は、隅丸方形を呈するもの—7基、円形を呈するもの—29基、椭円形を呈するもの—56基、不整円形を呈するもの—9基、不整椭円形を呈するもの—14基、不明なもの—1基の計116基である。これらのうち、何例かは重複し新旧関係を持っており、土壌が一時期でないことを示している。主軸方位についてみると、N—15°—W、N—40°—W付近、N—20°—E、N—30°—Eに集中する傾向がみてとれる。が、総体的にはみれば、不定方向であることがいえる。（表—1）

深さは、最も浅いものが0.06m、最も深いものが0.91mで、0.10mから0.50mの中に3分の2以上がはいる。（表—2）

次に発掘時の所見から、土壌底面の状態と、土層についてみることにする。

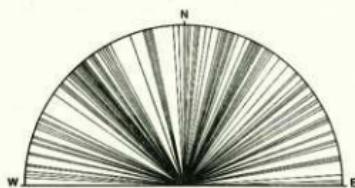


表 1

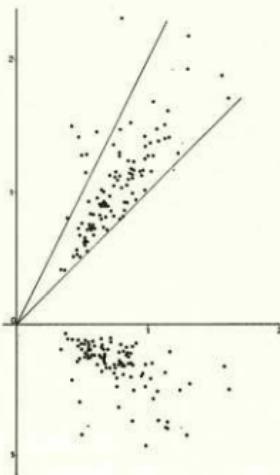


表 2

土壇は、掘りっぽなしで、底部が軟弱なものと凹凸があるもの、平坦で硬化しているもの、凹凸があり硬化しているもの等があり、硬化しているものは14基と少ない。

土層は、総てが自然堆積層を成し、壁際と、底部付近に色調の明るい土が堆積する傾向を示す。出土遺物についてみると、1号土壇を除き小破片で、殆んどが流れ込みによるものと思われる。出土土器は、116基中42基に認められた。また、土器以外の出土遺物で重要なものがある。27号土壇より出土した鉄滓がそれである。調査区の南西部に、以前調査され報告された製鉄址と関連するものとして注意されよう。

以上、観察した所見を列記してきた。

7号土壇、31号土壇を除いて、他の総てが恐らく縄文時代の土壇であると思われる。これらは、神谷原遺跡（新藤 1982）や岩手県西田遺跡（佐々木 1980）のような、中央土壇群的性格をもつものではなく、住居址に隣接する土壇群と、位置、性格とも酷似していると言えよう。

（樋口 誠司）

3 出土土器について

(1) 縄文時代

今回の調査区で出土した縄文式土器は、中期後半の土器が大半で、早期及び後期の土器が若干存在する。中期後半の土器では加曾利EⅠ式～EⅢ式段階の土器が主で、他の段階の土器は殆んど出土していない。今回の調査区に隣接する既報告のA区では、後期後半から晚期前半の土器が出土しており。今回の調査区でこれ等がみられないことから、遺跡全体からすれば時期的に遺物の分布が異なることが予想される。

第1群土器は早期前半の燃糸文系の土器群であり、稻荷台式段階の土器である。条間が密であり、縄文、燃糸が施文されている点で、南中丸遺跡（早川 1962）の第3類から第6類に比定されるものと思われる。大宮台地で早期前半の遺跡は、燃糸文系土器群後半の遺跡が多い。

第2群土器は早期後半の条痕文系の土器群であり、条痕文のみで文様がないため広義の茅山式に含めておきたい。

第3群土器は中期後半加曾利E式及び同段階の土器群である。大山遺跡出土土器を器種別に分類すると、キャリバー形を呈する加曾利E式系統の土器群（第I類）、連弧文土器（第II類）、曾利式系統の土器群（第III類）、口縁部が無文帶で朝顔状に開く深鉢形土器（第IV類）、浅鉢（第V類）、地文のみの深鉢形土器（第VI類）、その他のもの（第VII類）となる。

第I類は頸部無文帯を有するa種と、頸部無文帯のなくなるb種が存在する。従来、頸部無文帯の存在の有無は型式区分の重要なメルクマールとされて来たが、笠森建一氏（笠森 1977）、谷井彪（谷井 1978）、宮崎朝雄氏（宮崎 1979、1982）等の研究によって、頸部無文帯の有無では必ずしも型式区分のメルクマールに成り得ないことが指摘されてきた。大山遺跡では第1号住で両者（第10図1、2）が出土しており、同様に同一住居跡から両者が出土する例は、西原遺跡第27号住（宮崎 1972）、二宮遺跡第7号住（紀野 1978）、鶴川J地点遺跡第10号住、第17号住（河野 1972）、下寺田遺跡第7号住（新藤 1975）、門田遺跡第8号住（新藤 1976）、貫井南遺跡第14号住（安

孫子 1974)、堂ヶ谷戸遺跡第2号住(桜井 1975)、綱島園内遺跡第1号住(野本 1980)、平山橋遺跡第5号住(高林 1974)等があげられる。これ等の住居跡出土土器は他の組合わざる土器の相違等から、同一段階に位置付けられるものではない。第10図の2は頭部無文帯を有するが、隆帯が波状のモチーフを描き、口縁部文様帶下端部の区画が不明瞭になっている。同図1は頭部無文帯を持たないが、2本の隆帯で弧状のモチーフを描く点で類似している。1は隆帯の連結部に小さな渦を巻くが、2には認められない。1が中山谷遺跡第6号住(新藤 1975)、新座遺跡第5号住(坂詰 1965)、西原遺跡第15号住、木曾呂表第3号住(並木 1978)、秩父山遺跡第7号住(金子 1978)出土土器等でみられる様な、渦巻を垂れ下がる隆帯で弧状に連結するモチーフの系譜下にあるとすれば、2の波状文もそれ等の影響を受けているものとも考えられよう。しかし、その半面、2は大山遺跡という地理的条件からすれば波状モチーフという点では、単位数及び隆帯本数が異なるが、子和清水遺跡第29号住、第58号住、第148号住(関根 1978)等にみられる波状文の影響をも無視し得ないものと思われる。また、このモチーフを理解するにあたっては、柳遺跡A2号住(末木 1975)、大深山遺跡第4号住(八幡 1976)等信州方面にみられる曾利Ⅱ式とされる、渦巻つなぎ弧文土器(末木 1981)も重要な要素となるであろう。いずれにしても、加曾利EⅠ式末段階での曾利式と加曾利E式相互の影響及び折衷の仕方、その度合を地域的な様相をからめて明らかにする必要があろう。

隆帯を連弧状に連ねることによって口縁部文様帶区画が不明瞭になり、やがて頭部無文帯が消失していく過程は文様及び文様帶の変化の一つの方向性であり、この方向性とは別に、渦巻文と区画文からなる本来的な加曾利E式系統の変化の方向性が存在しよう。口縁部文様帶のモチーフは、梢円形の区画文と渦巻文からなるもの、区画文と渦巻文が一体化するもの、渦巻文が主導的となり間に区画文を配するもの、波状を呈するもの等が存在する。いずれも整然と区画された口縁部文様帶の内部に割り付けられるため、文様帶自体の崩れは認められない。

ではどの様な過程で頭部無文帯がなくなるのであろうか。門遺跡第8号住出土土器が、この間の状況を示しているものと思われる。同住居跡からは渦巻文主導形で幅の広い頭部無文帯が区画されるものの、渦巻文と区画文からなり幅の狭い頭部無文帯が区画されるもの、渦巻文と区画文からなり頭部無文帯が存在しないものが出土している。このうち、渦巻文と区画文の土器はモチーフが類似し、三文様帶と二文様帶の土器が存在する。三文様帶の土器は頭部無文帯が狭い。また、渦巻文主導形の土器は器形の大形化に伴い、頭部無文帯の幅が広くなっている。本来、頭部は無文帯となるべきはずであるが、織文が施されて文様帶化しており、無文帯としての意識が薄らいでできているものと思われる。頭部無文帯が文様帶となることで、文様帶内での区画、胴部文様帶の迫り上がりが可能となる。前回報告分の大山遺跡54-6号住、8号住出土土器はこの間の状況を示しているものと思われる。住居跡分析の項でも触れたが、54-6号住はすでに確立された連弧文土器を伴う段階であり、他の器種にも連弧文土器の影響が窺われる。その中でキャリバー形の土器は、頭部文様帶に地文を持ち、窓枠状の区画が施されている。また、54-8号住出土土器は、見方によつては第54-6号住出土土器と類似する頭部文様帶の区画と、胴部文様帶の文様とが折衷している状態として捉えられよう。同住居跡出土土器は、三文様帶を踏襲する系譜下に置かれるものと思われるが、曾

利Ⅰ式段階とされるキャリバー形土器の胴部文様帶の在り方や、大木8b式の系譜を引く要素等の影響を受けて、大宮台地という在地化した土器として成立したものと思われる。

また、島之上遺跡第2号住からは、先の口縁部に連弧状の隆帯で渦巻を連ねる土器の系譜下に置かれると思われる土器が出土している。この土器も、頸部に地文として繩文が施されており、胴部文様帶には大木式系統の文様が描出されている。口縁部文様帶は繩文ではなく、沈線が充填されたり、口縁部モチーフが本来的な加曾利E式系統のものではないことを示しているものであろう。個体として大山遺跡54-6、8号住出土土器と島之上遺跡第2号住出土土器とを比較した場合、後者の方に古い様相が窺える。他に、島之上遺跡16号土壙からは、頸部無文帶を残しながらも、口縁部文様帶モチーフの著しく変形された土器が出土している。さらに舟山遺跡第1号住（谷井1980）では、大山遺跡54-6、8号住居跡出土土器より後出的な感じを受ける土器が出土している。

この様に、埼玉県内に於いてさえも加曾利EⅠ式からはEⅡ式への移行期には、複雑な地域性が顕在化しており、関東及びその周辺地域を含めた範囲で該期を検討した場合には、より錯綜とした状態が予想される。

次に、第1類b種は口縁部文様帶と胴部文様帶の二文様帶構成のキャリバー形土器である。今回の調査では、第2号住、第3号住から良好な資料が出土している。b種の口縁部文様帶モチーフには、島之上遺跡第3号住、鴨田遺跡第8号住、子和清水遺跡B3号住等にみられる渦巻文と区画文からなるもの、礎花遺跡第8号住（岡崎 1981）海老ヶ作貝塚（岡崎 1972）等にみられる渦巻文主導形のもの、貫井南遺跡第13号住（安孫子 1974）等にみられる区画文のみのもの、海老ヶ作貝塚等にみられる三角形区画からなるもの、子和清水貝塚第29号住にみられる波状文からなるもの等が存在する。その他、各モチーフの中間的な様相を持つ土器も存在する。今回調査の第3号住第25図3は、渦巻が組み合わさって入り組む部分に梢円形の区画文を配しており、区画文と渦巻のモチーフと渦巻主導形のモチーフとが組み合わさった構成をとる。胴部は3本沈線の懸垂文と2本沈線の蛇行懸垂文が交互に配される。沈線間は磨消されていない。類例は馬場（小室山）遺跡第3号住（青木 1982）から出土しており、大きさ、口縁部モチーフ、懸垂文等酷似している。この口縁部モチーフは恋ヶ窪遺跡第6号住（秋山 1979）出土土器に祖形的なモチーフがらみられ、渦巻文と区画文のモチーフを融合することによって、整えられたものであろう。また、第25図5は、渦巻文主導形のモチーフを持ち、3と同様な懸垂文を持つ。類似したモチーフを持つものとして、礎花遺跡第8号住出土土器があげられる。両者を比較すると、大山遺跡出土土器は隆帯が断面カマボコ状というよりも、押しつぶされた様な扁平化したものとなり、口唇長の造りも平坦となっているため、礎花遺跡第8号住出土土器より後出的な感じを受ける。第25図5と同段階と思われる土器は、八番遺跡第4号住（野中 1980）から出土している。第25図3、5の口縁部モチーフは同一単位の反復原理によるものではなく、鈴木敏昭氏が指摘する如く（鈴木 1982）、＜対象性の破れ＞が認められる。3では1箇所梢円区画を二つ配する部分があり、5では渦巻文すべてに何らかの変化及び相違点が認められる。

第1類は連弧文土器である。連弧文土器のスタイルは胴部で文様帶を上下に分離し、上半部また

は上・下半部に連弧文を施すことであり、上下の文様要素が組み合はさって、バラエティーに豊む（桐生 1981）、連弧文土器は能登健（能登 1975）、笹森健一（笹森 1977）、秋山道生（秋山 1980）、桐生直彦各氏によって段階的な変遷が論じられてきた。実際、加曾利E式土器、特に渦巻文系統のキャリバー形土器の変化と呼応するわけではなく、極めて個体差の著しい土器と思われる。しかし、連弧文土器の発生的な要因、他の土器への影響、文様及び文様構成の崩れ、収束の仕方等の観点から、加曾利E式土器の変化と比較検討することで、地域的な様相をも含めて相対的な変遷過程を辿ることが可能となろう。

a種は定形的な連弧文が描出されるもので、今回の調査では出土量が少ない。第18図8は連弧文の接点から沈線が垂下され、胴部区画線と連弧文との間に枠状区画が成されるものである。類例は島之上遺跡第1号住、下南原遺跡P1（鈴木 1982）、西原遺跡P7、扇山遺跡第21号住（山田 1982）、荒屋敷貝塚（斎木 1978）等で出土している。また、この文様要素は、鶴川丁地点遺跡第33号住出土土器の様に連弧文と組み合はさって変形されたり、八幡山遺跡第3号住（寺田 1979）、松原遺跡（水沢 1979）、岩の上遺跡第9号住（栗原 1973）出土土器の様に渦を卷いたり、鋸歯状を呈する様に変形されながらも、連弧文の付加要素をして坂東山遺跡第27号住（谷井 1973）出土土器にみられる様に、加曾利EⅡ式の新段階にまで継承されている。

b種は連弧文が不定形なものをまとめてみた。第3号住出土の第25図8は、連弧文が三段に施されるものであるが、下二段の施文法がみだれている。器形は他の連弧文土器と異なり胴部の括れ弱く、胴部の文様帶分帯は行われていない。他の出土土器から磨消繩文導入以前の位置に置かれるがと思われるが、連弧文土器としてのスタイルはとっていない。動坂遺跡第7号住（安孫子 1978）からも胴部を分帯せず、連弧文を四段にわたって施文する土器が出土している。伴出する曾利式系の土器から、大山遺跡第3号住と近い位置に置かれるものであろう。また、第2号住出土の第16図3は連弧文土器としてのスタイルをとるもの、連弧文自体は定形的な整ったものとは言えない。連弧文の描出法は他とは異なり、沈線を連結部で合わせる形をとるものである。伴出土器は磨消繩文手法導入以前である。連弧文土器発生時から定形的な連弧文の他に不定形な連弧文が存在していたかどうかは不明であるが、大山遺跡では加曾利E式土器に磨消繩文手法がみられない段階に、既に不定形な連弧文を描出する土器が存在することになる。第16図3と第25図8は炉内より出土したもので、炉体土器との伴出関係は確かなものであり、かけはなれた時間差を持つものではない。

c種は胴部を分帯する点、また器形等からも連弧文土器のスタイルをとるが、連弧文の描出されない土器であり、連弧文系土器（桐生 1981）と呼称されている土器である。大山遺跡の場合、a、b種よりもc種の方が多く出土する。第25図は1島之上遺跡第3号住出土土器と類似し、第16図5も同様なものであろう。第16図4は、胴部区画線が変形して橢円形の区画になったものと思われ、類例はない。第25図2は上半部文様帶に沈線を垂下して区画するもので、交差点状区画または恋ヶ窓遺跡第4号住出土土器にみられる様な区画と類似するものであろう。

また第25図7は渦巻文が連弧文状に連結されるものである。渦巻文が口縁部付近から斜位に垂れさがるモチーフは下南原遺跡P1、当麻遺跡第72号住（住白 1977）石出土土器にみられるが、第25

図7はこれ等の要素が連弧文モチーフの影響を受け連弧文状に変形されたものと思われる。新しい段階では花影遺跡第1号住（谷井 1974）出土土器にこの顕著な例がみられる。連弧文と同様に文様要素の一つとして変遷しているものであろう。他に、連弧文土器としてのスタイルはとらないものの、尾崎遺跡第20号住（岡本 1977）、八幡山遺跡第4号住出土土器の様に、口縁部に隆文で弧状のモチーフを描く土器が存在し、やはり、連弧文土器との関連性を持ちつつ一つの系統性をも持つて変遷している。

第Ⅲ類としたものは地文と沈線、条線が施文される曾利式的色彩の強い土器である。第11図22、第72図62は矢羽状沈線が施文されるもので、曾利Ⅰ～Ⅲ式に比定されるものであろう。他は、条線をベースとして施文する土器であり、大宮台地大山遺跡周辺では曾利式に比定される良好な資料は出土していない。曾利式土器が少ないことからも、大山遺跡の地域性が窺われる。

第Ⅳ類は口縁の無文帯と胸部の文様文帯から構成される口縁の開く深鉢形土器で、勝坂式からの系譜が辿れるものであり、加曾利E式の中でキャリバー形土器と並ぶ器種である。加曾利EⅠ式の古い段階では舟山遺跡第5号住から出土しており、加曾利EⅠ式の新しい段階では、二宮遺跡第3号住（紀野 1978）、平山橋遺跡第4号住（高林 1974）、下寺田遺跡7号住、坂東山遺跡16号住等から出土している。第10図3は口縁が大きく開くものの口唇部の内側が肥厚し、上記住居跡出土土器と同じ系譜下にあるものと思われる。また、地文を条線にかえたり、頸部区画を隆帶にかえると曾利式土器と類似し、器形的には裏腹の関係にある。第59図1は頸部の括れは第10図3程強くないが、口縁部を無文とする点等から同様な系譜関係が窺われる。

第Ⅴ類は浅鉢形土器で、頸部と胸部で屈曲するもの（a種）と口縁が開くもの（b種）が存在する。a種は第17図1、第59図3の様に屈曲が強く、大形化する傾向にある。胸部文様帯は渦巻文を基本としたモチーフが描出され、内部に沈線が充填されている。加曾利EⅠ式の新しい段階では二宮遺跡第3号住、下寺田遺跡第7号住出土土器に既にこの傾向がみられる。b種も器形が大きく開きの強いものとなり、口唇部が肥厚して外傾するのが特徴的である。b種の浅鉢は開きが弱くなり、器高が高く、口縁部が立ち気味に変化する傾向がある。

第Ⅵ類は地文のみの土器群で、繩文と条線が使用される。第25図9は口縁が内彎し、地文に条線が施文される。胸部の括れが強く器高の高い土器である。類例は今島田遺跡Ⅱ・Ⅲ土壙（熊野 1969）から出土している。今島田遺跡例は伴出土器を比較すると、第25図9より後出的な感じを受ける。また、第25図4や第73図80は繩文が施文される土器である。この様な地文のみの土器は文様の描出されない粗製土器というよりも、土器組成の中の一役を担うものと思われ、曾利式系統の土器が少ない地域に特徴的な存在となっている。

第Ⅶ類はその他の土器群を一括した。器種は壺形土器、器台、口縁部文様帯の喪失する深鉢形土器、他系統の土器等が含まれる。第59図1は口の広い小形の壺形土器と思われ、頸部の沈線間に刻みを施す手法は大山遺跡54-2号住にみられる土器と類似する。胸部の懸垂文間に配される弧状のモチーフは類例に乏しいものである。口縁部文様帯を喪失する土器は、坂東山遺跡第21号住、第27号住、池田遺跡第26号住（佐々木 1976）黒谷田端前遺跡第12号住（宮崎 1976）、鶴川J地点遺跡第20号住、吹上遺跡第27号住（小林 1978）等の加曾利EⅠ式新段階の住居跡で既に出現している。

る。大山遺跡では54—3号住、5号住から出土しており、今回の調査区内からも出土している。実際、口縁部破片では第Ⅱ類C種と判別しづらく、第Ⅲ類C種と分類した中には、口縁部文様帯を喪失した土器の破片が含まれている可能性も残る。第Ⅱ類C種の口唇部形態は内側に肥厚する点が特徴的であるが、一様にその傾向が認められるとは限らない。第18図10、13、16、第35図14は口縁部文様帯を喪失する土器の口縁部破片であろう。

他に第Ⅶ類としては平坦な隆帯で劍先文状渦巻を連結し、地文に細かな刺突文を施すもの（第36図25～31）、地文に角棒状工具による刺突文を持つもの（第12図35、36、第72図68）、沈線の代りに二列の列点文が垂下するもの（第68図25）、胸部に渦巻と劍先文状の懸垂文が組み合わさったモチーフが描出されるもの（第11図21）が存在する。第36図25～31、第12図35、36等は、胎土、焼成とも他の土器と異なり、一見して識別のできる土器である。隆帯で劍先状渦巻を連結するモチーフは大木式の系譜下に置かれるものと思われるが、周辺に類例が乏しく詳しく述べては不明である。また、第11図21も大木8b式の胸部モチーフの系譜を引くものと思われる。他の土器も類に乏しく、破片であるため不明な点が多い。

第Ⅳ群土器は後期の掘之内式土器であるが、Ⅱ式段階の土器片が多い。前回報告のA区からは同段階の大形の破片が出土している。また1点だけであるが、第69図56は平行沈線が5段にわたって施文されており、加曾利B式土器と思われる破片である。

以上、今回の調査で出土した土器を中心として、主に加曾利EⅡ式古段階の様相にない系統別に論点まとまりなく述べてきた。ここで、各住居跡出土土器にないて簡単に位置付けを行ってみたい。第1号第9号住出土土器は、谷井氏が加曾利EⅠ式直後（谷井 1978）と位置付けた土器よりも、若干古い様相を持つ土器群である。また、第2号住、第3号住出土土器は、キャリバー形土器に於いて磨消繩文手法はみられないが、連弧文土器に定形的な文様がみられること等から、全体的に加曾利EⅡ式の古段階に位置付けられるものの、その中でも中段階に近い位置付けをしておきたい。第3号住出土土器は島之上遺跡第3号住出土土器と類似した組成を持ち、同じ段階に位置付けられるが、若干新しい様相を持つものである。また、第2号住出土土器は、組成的には第3号住出土土器と同様であるが、個々の土器を比較した場合、やはり若干新しい様相をみてとることも可能であろう。第5号住居跡出土土器は、各段階の土器が含まれ、時期を決定し得る遺物は出土していないが、口縁部文様帯を喪失する土器の口縁部破片が出土していること、磨消繩文手法の土器が多くみられ、その中に地文としての繩文に充填手法がみられること、複節繩文が多用されること、浅鉢形土器の器高が比較的高いものと推定されること等の要素を総合すると、加曾利EⅡ式の中にあっても新しい段階に位置付けられる可能性が高いものと思われる。

複節繩文は加曾利EⅡ式の新しい段階に多用される傾向にあるが、大山遺跡では總体量のパーセンテージは出せなかったものの、遺跡全体から比較的多く出土している。第3号住出土の第23図3は、キャリバー形土器は複節繩文が施文される土器では一番古い段階のものではなかろうか。更に、前回報告分の54—2号住では、口縁部が無文帶の土器に、胸部地文として複節繩文が施文されている。大山遺跡の地域的な様相が窺われる。

また、磨消繩文のみられる土器は、出土土器總体からすると非常に少ない。加曾利EⅡ式の新し

い段階である54—3号住に於いてさえも、非常に少なく、出土土器は連弧文土器の影響を多分に受けているためとも思われるが、大山遺跡での特徴的なあり方を示しているものとも受けとめられよう。そして、第2号住覆土の中からも二本沈線間を磨消す懸垂文を持つ土器片が出土している。炉体土器と同一段階に属するかどうかは不明であるが、第2号住出土土器の様相から比較的近い段階に磨消繩文手法が導入されたものと推察される。磨消繩文手法のみられる古い例は、坂東山遺跡第20号住出土土器、西原遺跡第35号土壙等があげられる。資料不足の感はまぬがれないが、磨消繩文手法出現期の様相を明らかにしつつ、地域性も含めて大山遺跡と他遺跡を比較検討していかなければならぬであろう。

加曾利EⅡ式は山内清男氏の提示（山内 1940）以来、頸部無文帯を持たず磨消繩文の伴うものという範囲で理解されてきたのが現状であろう（新藤 1976、白石 1978）。しかし、頸部無文帯を持たず磨消繩文の伴わない土器の存在が明らかにされるに至って、加曾利EⅡ式とEⅢ式の中間的な段階の土器群が注目されてきた。近年、加曾利E式土器編年研究に対して、基準的な足踏みを描えるべく、シンポジウム（神奈川考古同人会 1981、日本考古学協会 1981）が開催され、問題点が明らかにされてきている。今後、該期の研究、特に加曾利EⅡ式期の研究では、曾利Ⅱ式からⅢ式への変化、曾利式と加曾利E式との関連から初頭期の地域的様相及び連弧文土器の出現、磨消繩文手法の発生、口縁部文様帯を喪失する土器の出現といった観点から、段階的な変遷を地域的に明らかにしていく必要があるようと思われる。尚、上記の問題については、機会を改めてまとめてみたいと思う。

(金子 直行)

(2) 古 墓 時 代

大山遺跡第6号住居跡（以下大山遺跡6住とする。他の遺跡も、これにならう。）からは、鬼高Ⅰ期に属する土器が4点出土している。本項において、これらの出土した土器と、前回報告の大山遺跡出土土器も合わせて位置づけを行ないたい。ただし、大宮台地に鬼高Ⅰ期に属すとされる土器を出土した遺跡は少なく、列記すると、浦和市日向遺跡（浦和総務都市史編さん室 1974）・白銀遺跡（青木 1966）・本村遺跡（埼玉大学 1967）、与野市白銀遺跡（大塚 1959）（これは浦和市のものと近接しており同一遺跡と考えられる）、北足立郡伊奈町大山遺跡（中島 1979）にすぎない。このため大宮台地の資料を用いて、位置づけを行なうこととはできない。そこで、比較的編年作業の進んでいる県北部（児玉郡中心）の編年観を用い、これらに加え、東松山市駒堀遺跡（横川 1974）・舞台遺跡（谷井 1974）の資料も混えて位置づけを行ないたい。

まず、大山遺跡6住出土遺物を簡単に説明してみたい。小型壺形土器（以下小型壺とする。他の土器も、これにならう。）は、口縁部に段をもつ。この器形の大型品はよく知られている。胴部は肩が張らず、ほぼ球形に近い。口縁部は横ナデされており、胴部は全体を箆削りした後、上半を丁寧にナデ消している。胴部内面は全体をナデ調整した後、上位を箆削りしている。杯は有段の模倣杯である。口縁部は反り気味に直立する。端部は段をなし、須恵器にみられるものを忠実に模倣している。体部は腰が張らない。器高のなかで、体部の占める割合が大きく深い。口縁部と体部の境目の段はしっかりとしている。調整については、口縁部下半を横ナデし、同時に段の部分も行なう。

そして上半をもう一度横ナデしている。二度目の横ナデは上半にはっきり認められる。体部は箒削りである。甕は2点ある。口縁部は強く外反し、内面にはとんど使をもたない。胸部は撫肩で、中央に最大径をもつが、僅かに下膨れの感を呈す。口縁部は横ナデされている。胸部外面は箒削りの後丁寧にナデ消したものかもしれない。明晰な箒削りの跡は認められなかった。底部は箒削りの後ナデしている。胸部中央より下は丁寧にナデされているが、上位は箒跡が残る。箒ナデかもしれない。もう一点は口縁が外反し、内面に明瞭な稜をもつ。胸部は中央よりやや上に最大径をもち、わずかに肩が張るように見える。口縁部と胸部外面上端をいっしょに横ナデしている。胸部外面は肩より下を強く箒削りしている。底部も箒削りである。胸部内面は箒ナデである。以上説明がやや長くなつたが、これらの特徴をもつ土器が從来の編年でどのように位置づけられるであろうか。編年の中で比較的わかりやすい杯を中心にみてゆきたい。

中村倉司氏は、模倣杯の出現は3回に亘っておこなわれるとしている(中村 1979)。1回目は第Ⅲ段階で、諫訪遺跡45・46・48住、下田遺跡6住が、この段階に相当するとしている。2回目が第Ⅴ段階で、地神抵A遺跡18住、臺遺跡34住が相当する。この段階の特徴は、甕は長胴化が急速に進み、甕に長胴化したものと、それが弱いものとのバラエティーが生じる。口縁部は屈曲が弱まり、上方に立ち上る。大型甕も甕と同様に長胴化し、小型甕は存在しない。2回目に出現する須恵器模倣杯の特徴は、口縁部が長く直線的に上方へ立ち上る、体部の深いものとしている。大山遺跡6住の甕と臺にはそぐわない点もあるが、杯を中心にみるとおおよそ中村氏の第V段階に該当することがわかると思う。

石岡憲雄・浅野晴樹の両氏は、六反田遺跡をXXI期に分けている(梅沢 1981)。この中でA区72住出土遺物を中心にして、第Ⅶ期を設定している。第Ⅶ期について簡単に触れると次のようになる。臺は口縁部有段で「く」の字状に外反する球形胴のものと、素口縁で「く」の字状に外反するもの、口縁部の屈曲が弱く上方へ立ち上るもの等バラエティーに富む。甕は、大小があり急速に長胴化が進む。底部が円盤高台状を呈するのが特徴である。甕は筒抜け底孔の大型と小型があり、甕の長胴化にあわせて、より緩やかな曲線で長胴化する。高杯は須恵器模倣杯を乗せるものが出現する。杯には、口縁部須恵器模倣で平底のもの、須恵器模倣の丸底、単純な内彎丸底が普遍化し、中間的なものもある。陶邑第I型式の終末に比定される須恵器を共伴している。以上が六反田遺跡の第V期である。大山遺跡6住は、この段階に相当する。

利根川章彦氏は(利根川 1982)、和泉期後半から国分までをⅢ期に分けている。利根川氏は、模倣杯をA、B、Cの3つに分け、模倣杯Aの始まるⅠ期を鬼高窯の初原とし、諫訪遺跡49住、下田遺跡1住、西富田新田遺跡7住、東五十子遺跡8住、二本松遺跡6住の遺物をあてている。有段の模倣杯B、Cの出現はⅢ期にあて、下田遺跡24住、諫訪遺跡45・46・48住、地神抵遺跡A17住、辱薩神社前遺跡14住をあてている。Ⅳ期には、下田遺跡6・2住、地神抵遺跡A18住、精神場遺跡A-4住の遺物をあてている。有段の模倣杯、有段の臺、甕を考慮すれば、ほぼⅣ期に大山遺跡6住の遺物が相当するであろう。以上、各氏によってそれぞれ設定された段階は、一律に同段階におけるのはもちろんであるが、中村氏の第V段階、石岡・浅野両氏の第V期、利根川氏のⅣ期、ひいては、それらの段階に相当する大山遺跡6住の土器の実年代は、現時点での位に置くのが妥当で

あろうか。群馬県と埼玉県北部の一部の遺跡には、ほぼ大山遺跡6住出土土器に相当する時期に榛名山二ツ岳火山灰降下（以下FAとする。）が知られている。このFAを手掛りに、述べてみたい。

高崎市上滝遺跡1号溝（平賀 1981）では、FAを主体とする黄褐色の水性堆積層のⅢ層下から、鬼高期の最も古いとされる土器が多量に検出された。そして、これらの遺物は明らかにⅢ層堆積以前に投棄され、その後短期間にⅢ層が堆積したことが明らかにされている。土器は、長胴化傾向にある壺や、複合口縁の系譜をひくとされる壺、胴部の張る大型瓶、内斜口縁の杯、須恵器の影響を強く受けた杯、有段の模倣杯、須恵器Ⅰ型式1、2段階階に比定される高杯等がみられ、和泉期の特徴を示す土器群と鬼高期の特徴を示す土器群が混在する状態を呈す。このような土器の様相を呈す遺跡で、FAと床面に間層をはさむものには、佐波郡境町鳥海戸遺跡2住（小林 1979）がある。出土した土器は、長胴の傾向にある肩の張らない壺の口縁部、鬼高期に通常みられる口縁部が内彎気味に開き、頸部が強く収縮し、胴部が橢円形を呈すと思われる小型壺の口縁部、須恵器の影響を強く受けた杯等である。これらの土器に対して、小林敏夫氏は、「和泉期の名残りを留める鬼高式初期のもの。杯の形態に須恵器の模倣は認められるが鬼高Ⅰ式に見られる定形性がうかがえない。」としている。また同様なものに勢多郡赤城村寺内遺跡6住（井上 1979）があるが、層の厚さ、間層の幅から、島海戸遺跡2住よりも先行する可能性を仮定できるかもしれないとしている。斎藤国夫氏も（斎藤 1981）、「壺の長胴化傾向、杯の直立ないし内傾ぎみに直立する口縁の形態等からやや後出の觀がある。」としている。床面にFAをもつものには、群馬郡群馬町保度田遺跡5住（井上 1979）、佐波郡境町十三宝塚遺跡74住がある。前者は、頸部のクビレの弱く、胴部の張りの弱い筒抜け状の大型瓶、短脚の高杯、口縁部が短く内彎して開く丸底の杯、半球形ないし、口縁部内彎の杯、口縁部が内斜する平底の杯、口縁部がやや外傾して開き、口縁部と体部の境目に段をもつ模倣杯をもち、後者は、口縁部が長く反り気味に直立し、体部が浅く口縁部との境目に浅く内彎する杯をもつ模倣杯と、それに低い脚をつけた高杯等をもつ。模倣杯の形態は、鬼高Ⅰ期によくみられる安定したものとなっている。埼玉県北部でこれらの様相に対応する遺跡は、どのようなものがあるであろう。

口縁部と体部の境に段をもつ杯を出土した鬼高期の古いものとされる遺跡には、本庄市下田遺跡2・6住、本庄市諏訪遺跡48住（小久保 1979）、大里郡岡部町地神祇遺跡17住（佐藤 1978）児玉郡美里村顯蔵神社前遺跡14住（中村 1980）がある。諏訪遺跡48住の遺物について簡単に述べてみよう。壺は球形胴を呈し、口縁部は有段で、緩やかに外反し、端部は摘み上げる。胴部はハケ目成形の後下部だけを範削りする。口縁部内面にハケ目を残す。胴部内面は籠ナデしている。上げ底を呈す壺は完形品ではないが、長胴化傾向にあるもの、口縁部が反り気味に直立し長胴のものと、口縁部が立ち気味に開く小型壺がある。大型瓶は頸部の屈曲が強く胴部の張るものと、頸部の屈曲が弱く胴部の張らないものがあり、いずれも筒抜状である。小型瓶は鉢形単孔である。杯は有段のものや、口縁部が内彎し、段をもつもの、稜をもつもの等バラエティーがある。ほとんどのものが丸底を呈している。以上の説明でわかるように、壺、壺、瓶、杯で上滝遺跡1号溝出土土器に類似しているのがいくつか存在し、諏訪遺跡48住がほぼ併行期にあることがわかる。では、諏訪遺跡48住より先行する土器を出土する遺跡はどうであろう。これに該当するのは、本庄市西富田新田

遺跡 7 住(本庄市史編集室 1979)、諫訪遺跡 49 住、北足立郡吹上町袋・台遺跡 3 住(田部井 1982)があげられる。諫訪遺跡 49 住は、有段の壺、長胴化傾向にある壺と、口縁部がやや立ち気味に開くが、長胴化のみられない壺、筒抜け状の大型瓶、器高が 13cm 前後で暗文のみられる高杯、脚付碗、陶質土器の蓋を模倣したとされる蓋、口縁部の内彎する丸底の杯、口縁部が短く外折する丸底の碗、腰の張らない平底の杯、球形胴で丸底、偏球形で平底の小型壺、そして、田辺編年 TK 208 ~ TK 23 型式、中村編年 I 型式 3 ~ 4 段階に対応するとされている須恵器無蓋高杯がある。この段階に相当する土器には、須恵器模倣と思われる杯は、現時点では存在しない。また、平底の杯が目立つ。袋・台遺跡の杯は、寺内遺跡 6 住の杯によく似ている。以上のことから諫訪遺跡 49 住が 48 住より、僅かであるものの先行することがわかる。そして、FA を加味してみると、ほぼこの段階は、寺内遺跡 6 住に併行すると考えられる。これらのことから諫訪遺跡 49 住より出土した、中村編年 I 年型式 3 ~ 4 段階とされる須恵器無蓋高杯が、上滝遺跡 1 号溝出土の I 型式 1 ~ 2 段階とされる須恵器高杯に伴なう 2 群土器より古い土器に伴なって出土したことになる。もちろん、諫訪遺跡 48 ~ 49 住両段階の時間差は極めて小さく、オーバーラップしている部分も充分推測しうるが、須恵器の消費地である集落内でのあり方と、若干の伝世、さらには、在地窯の問題を如実に物語っていると言えよう。

埼玉県北部で諫訪遺跡 48 住段階の次に位置づけられる遺跡に児玉郡児玉町臺遺跡 34 住(中村 1980)、藤蓮神社前遺跡 7 住、大里郡岡部町六反田遺跡 A 区 72 住、大里郡岡部町後榛沢遺跡群 M-1 遺構、行田市池守遺跡沼地 № 3・6 遺跡があり、斎藤国夫氏によれば、地神祇遺跡 18 住は 17 住を切り、後榛沢遺跡群 M-1 遺構出土のものに類似するとされるから、地神祇遺跡 18 住も加えられる。古墳出土の資料としては、行田市梅塚古墳(埼玉県さきたま資料館 1975)、熊谷市鎧塚古墳(寺社下 1981)がある。また、池守遺跡沼地 № 3・6、後榛沢遺跡群 M-1 遺構はいずれも FA が認められ、FA 降下直前の土器を出土している遺跡として知られている。これらは、いずれも鬼高 I 期とされる安定した須恵器模倣杯をもち、口縁部有段の壺、長胴化傾向の壺等がみられ、梅塚古墳では、須恵器蓋杯 3 点と杯身 3 点、それによく似た模倣杯が 2 点出土している。また鎧塚古墳では、第 1 次墓前祭祀土器群に口縁部直下に凸帯をもつ須恵器高杯形器台と、脚部に四方の透孔をもつ須恵器無蓋高杯に、有段の模倣杯、ホゾをもつ高杯がみられ、第 2 次墓前祭祀土器群に須恵器高杯形器台と、脚部に三方の透孔をもつが不均等に透孔が配置されている須恵器高杯に、有段の模倣杯、柱状部が強く張りだす高杯がみられる。これらの遺物に対して調査者は、前者の高杯形器台に對して陶邑 I 型式 1 段階から 2 段階、無蓋高杯に對して陶邑 I 型式 2 段階から 3 段階に比定し、後者の高杯形器台に對して陶邑 I 型式 2 段階から 3 段階、無蓋高杯を陶邑 I 型式 3 段階に比定している。また無蓋高杯の胎土に白色粒子を含むことから、在地窯の初源を、児玉郡児玉町ミカド遺跡の須恵器により指摘された陶邑編年 I 型式 4 段階よりもさらに古く、I 型式 2 段にまで遡る可能性があるとしている。しかし、須恵器高杯に限ってみれば、第 1 次墓前祭祀址出土のものは陶邑 I 型式 4 段階、第 2 次墓前祭祀址出土のものは陶邑 I 型式 5 段階に比定されるべきものと考えられ、また、これらの須恵器高杯に伴なう土師器は、第 1 次・第 2 次墓前祭祀址出土の双方とも、それぞれ器形、手法、組成にまとまりがみられることから、それぞれの土師器群について、複数埋葬に伴な

い隨時製作されたと考えるより、むしろ製作投棄（供獻）に同時性を認めるべきであると思われる。以上のことから須恵器の型式差を考慮して、第1次墓前祭祀址出土土師器は、第2次墓前祭祀址出土土師器より先行し、前段階に含まれるべきものかもしれないが、第2次墓前祭祀址出土土師器は該段階に属すと考えられる。そこで、該段階の実年代について述べてみたい。

上流遺跡1号溝、諏訪遺跡49住、鎌塚古墳の出土例により、消費地である集落や古墳での須恵器の在り方、在地窯における須恵器生産の初源、伝世の可能性、あるいは逆に、高杯形器台のような古式の様相を呈す須恵器に、伝世を認めないとすれば、それに伴なう須恵器高杯との型式的矛盾等の問題から実年代の比定を須恵器に頼ることは、危険性を伴なう。ただし、該段階以降になると、集落跡や、古墳からの須恵器の出土例が、ミカド遺跡、児玉郡児玉町後張遺跡、六反田遺跡A区72住、本村遺跡1住、東松山市番清水遺跡47住（金井塚 1968）行田市稻荷山古墳（栗原 1980）（陶邑I型式4ないし5段階に比定できる）等数多く、伝世の可能性は極めて少ないと考えられる。この段階以降（遡る可能性もある）鎌塚古墳にみられるような須恵器に対して伝世を否定し、製作に同時性を仮定することにより生じる型式的矛盾という特殊な例は極めて少ないと仮定すれば、梅塚古墳周囲より一括出土した、須恵器蓋杯、杯身と酷似する模倣杯が唯一の手掛りとなる。この段階に大山遺跡6住が比定され、該段階の土師器は、梅塚古墳出土の須恵器を陶邑I型式5段階に比定すればおおよそ、6世紀第1四半世紀を中心とする時期に位置づけられる。寺内遺跡6住、諏訪遺跡49住段階と上流遺跡1号溝、諏訪遺跡48住段階は、時間差が極めて小さいと考えられることから、両段階とも5世紀第4四半世紀を中心とした実年代を想定できる。以上のことから鬼高期の初源は、埼玉県北部において、どの段階を鬼高式土器におくかの問題を別にしても、從来言われているように6世紀初頭から5世紀末という想定をさらに古く遡らせるることは、現時点では必要ないようと思われる。

最後に6世紀第1四半世紀を中心とする時期に想定できる大山遺跡6住を中心とし、大宮台地あるいは周辺の資料を用いて前後関係にあるものをあげてみると、先行するものは、舞台遺跡4住、駒堀遺跡10住、併行するものとして、大山遺跡A区34住、本村遺跡1住、番清水遺跡47住、後出するものとして、大山遺跡C区1・3住があげられる。先行するものを5世紀第4四半世紀を中心とし、後出するものを6世紀第2四半世紀を中心とした実年代を想定することも可能かと思われる。

資料の少ないことを理由に、地域性を無視して群馬県、埼玉県北部の資料を使い強引に位置づけを行なってしまった。大宮台地に関して、下総西部地域との類似性を重視する意見もあり（利根川 1981）後日、機会を改めて、今回触れた問題について詳しく述べてみたい。（立石 盛詞）

(3) 平安時代

前述した様に、平安時代の住居跡は第7、9、10、11、12号住の5軒であった。遺物は第11、12号住から比較的まとまりを持って出土している以外、殆んどが細片であり量的にも少ない。数少ない図示し得た遺物から、若干の検討を試みたい。

出土土器は以下の様に分類できる。

須恵器

Ⅰ、回転糸切り離し後、底部外縁及び体部下端に回転ヘラ削り調整が施されるもの。酸化焰焼成である。口径に対する底径の法量比は0.48を測る。(第48図1)

Ⅱ、回転糸切り離し後、底部未調整のもの。

a、口縁が外反し、体部が膨らみ、底部近くで急激にすぼまるもの。口径に対する底径の法量比が0.52—0.53を測る。(第54図3、5)

b、口縁が外反し、体部下半が丸みを持ち緩やかに開き、体部の深いもの。口径に対する底径の法量比が0.5を測る。(第54図1)

c、口縁が外反し、体部が内彎気味に開いて深く、器肉の厚いもの。口径に対する底径の法量比が0.49を測る。(第54図6)

d、体部が直線的に開くもの。口径に対する底径の法量比が0.49～0.53を測る。(第54図2、4、7。)

類a～bは、全て第12号住から出土したものである。第12号住からは図示し得なかった杯の口縁部、底部が多数出土している。推定径の計測可能な口縁15個底部8個に対して、口径と底径の平均値を求めたところ、口径=12.1cm、底径=6.2cmという値を得た。口径平均値に対する底径平均値の法量比は0.512を測る。また、推定口径の上下限を除いた平均値と、推定底径の上下限を除いた平均値との法量比は0.517を測る。この値は、対象となる破片の中にa～d種が混在するため、単なる平均値に過ぎないが、同一住居跡から出土しているため、傾向を知る上では有効なるものとなる。

土師器甕

I、ほぼ直立する「コ」字状口縁を呈し、体部上半に横のヘラ削りがみられるもの。台付甕と思われる。(第54図11)

II、口縁が立ち気味に外反し、体部上半に張りを持ち、横のヘラ削りがみられるもの。(第48図3)

III、口縁部が若干開き気味に立ち、端部が平坦になるもの。体部に緩く張りを持ち、縦のヘラ削りがみられるもの。(第50図2)

IV、口縁が「」状に屈折するもの。一応甕として分類したが、瓶になる可能性が高い。(第54図1)

羽釜

I、口縁に向って体部がほぼ直線的に開き、口縁に最大径を持つもの。(第50図3)

以上、図示したものを分類したが、他に須恵器甕、高台付甕、皿、蓋、土師器甕、塊、甕等の破片が出土している。

奈良時代から平安時代の土器編年は、技法的、地域的なパラエティーの少ない須恵器の甕の変遷を基軸として、その体系が組み立てられてきたと言えよう。埼玉県内では、高第一夫氏が新久窯跡(坂詰 1971)、前内出窯跡(小川 1974)の成果を基にして、水深遺跡(栗原 1972)、荒神島遺跡(中島 1974)、山田台遺跡(谷井 1973)、岩の上遺跡(野部 1973)、熊野遺跡(中島 1974)枇杷橋遺跡(駒宮 1973)を編年的に位置付け、国分期の細分を試みて(高橋 1975)以来、土師器と総合して体系的な編年研究が進められてきた。

県内の奈良、平安時代の須恵器窯跡は、入間市東金子窯跡群、鳩山村周辺の南比企窯跡群、寄居町末野窯跡群が知られ、近年、三芳町新開遺跡（松本 1981）、富士見市栗谷津遺跡（佐々木 1979）から10C後半から11C前半に位置付けられる窯跡が発見されている。これ等の窯跡群の内、東金子窯跡群の新久窯跡と前内出窯跡が、須恵器編年の拠り所とされてきた。

新久窯跡からは武藏国分寺七層塔再建瓦と同窯瓦が検出されており、窯跡としては唯一の実年代が推定される窯跡であった。また、同窯跡群の八坂前窯跡第4、5、6号窯（坂詰 1981）でも武藏国分寺七層塔再建瓦を焼成していることが知られ、新久窯跡A地点1、2号窯は、窯体に再建瓦を再利用していると考えられており（有吉 1982）、塔再建瓦焼成以降の年代、つまり、塔再建発願記承和12（845）年を上限とする年代が与えられ、9世紀第3四半期に位置付けられるのが通説となっている。

また、新久窯跡出土土器は口径と底径の比率の相違によって、三段階に亘る変遷が指摘されている。谷井彪氏はA地点第1、2号窯、E地点第1号窯を、口径と底径の比が2前後であることから9世紀第3四半期に、C地点第1号窯、D地点第1、3号窯を、口径と底径の比がA地点より大きくなり2.5以上になることから9世紀第4四半期に、E地点住居跡出土土器を口径と底径の比が3近くになることから10世紀第2四半期に、それぞれを位置付けた（谷井 1976）。また、新久窯跡第D地点1号窯は、服部敬史（服部 1981）によって10世紀第1四半期に、松本富雄（松本 1981）宮昌之（宮 1982）阿氏によって10世紀第2四半期に位置付けられている。

平安時代須恵器坏の編年は、口径と底径の比率の研究を始めとし、河野喜映（河野 1976）、服部敬史、福田健司（1979、1981）、国平健三（国平 1981、1982）諸氏により、細部では見解が異なるものの新久窯跡A地点1号窯を中心として、各地窯事ごとの編年体系が確立しつつある。しかし、10世紀以降の年代観については、統一的な見解はみられない。

この様な研究の中で、埼玉県内の窯跡について年代観は別として、製作技法や口径と底径の比率の推移等から、前後関係が捉えられてきた。列記すれば、前内出2号窯→前内出1号窯→八坂前4、5、6号窯→新久A地点1、2号窯→末野2号窯→新久D地点1、3号窯→新開pb区窯→栗谷津1号窯という編年序列は大方の認めるところであろう。

それでは、上記の成果を基にして、大山遺跡住居跡出土土器の編年的な位置付けを行いたい。第12号住では、須恵器坏Ⅰ類と土師器窯Ⅰ類が出土している。須恵器坏Ⅰ類は糸切り離し後未調整であり、a～d種が存在する。図示したすべての坏に白針状物質が含まれている。口径に対する底径の法量比はaが0.52～0.53、bが0.5、cが0.49、dが0.49～0.53を測り、aが口径×底径×である他は、大方口径×底径×2の関係にある。このことは、破片の推定径からの比が0.512であることからも窺われる。しかし、c、dの中には0.5を若干下まわるものも存在するが、大きく下まわるものは存在していない。器形的にはcとdが類似し、aとbがタイプを異にしている。ここでは、一般的なc、dタイプの坏を基準にすると、第12号住居跡出土土器は新久A地点第1号窯に近い段階が考えられ、末野第2号窯（野部 1977）より以前のものと思われる。

第12号住出土須恵器坏には消費地特有の混在とした現象がみられるため、年代を決定するのに難しい面が存在するが、これ等出土土器が9世紀後半に位置付けられることは間違いないであろう。

更に細かく検討すれば、9世紀第3四半期の後半をあてることが可能と思われるが、第4四半期に入れる可能性も残される。第12号住出土土器は、器形的には将軍沢第6支群E地点（第1地点）（金子 1982、小野 1982）表採土器と類似するものも存在するが、口径と底径の法量比、器高等から、後出のものと思われる。

また、第12号住からは「コ」字状口縁を呈する土師器壺Ⅰ類が出土している。他に細片で図示しえなかつたが、口唇部が平坦で緩く外傾し「コ」字状口縁を呈さない壺、器肉が厚く口唇部の造りが外削状を呈して緩く外反するもの等、「コ」字状口縁の系譜下ではない壺が存在している。比較する資料が乏しいため、大山遺跡での地域的な在り方としか捉えられないが、同段階のものとして北坂遺跡第5、8号住（中島 1981）、山田遺跡第10号住、荒神脇遺跡第22号住等があげられる。しかし、第12号住の方が若干後出的な感じを受ける。

第10号住居跡からは壺Ⅰ類が出土している。酸化焰焼成であるが、前回報告の第45、56、60号住出土の酸化焰焼成土器とは異なるものである。Ⅰ類は底部糸切り離し後、底部外縁と体部下端に回転ヘラ削り調整が施されるものであり、底部中心付近に糸切り痕が若干残されている。底部に於ける糸切り離し後の調整については、前内出窯跡で検討してきた。Ⅰ類は、底部外縁及び体部下端に回転ヘラ削りの調整を施すという点では、前内出第1号窯出土土器に類似しよう。しかし、Ⅰ類は酸化焰焼成であり、底部の径も小さく、口径に対する底径の比は0.5を下まわる。口縁部は外側にめぐれる様な造りとなり、底部調整技法では前内出第1号窯からの系譜を引く可能性も残されるが、全体からすれば、前内出第1号窯跡とは関係のない新しい段階のものと考えられる。第10号住の攪乱内から土師器壺Ⅰ類が出土しており、これはカマド内出土土器と接合している。確定的なことは言えないが、恐らく壺Ⅰ類と壺Ⅱ類は伴う可能性が高いと思われる。壺Ⅱ類は口縁部が「コ」字状を呈さず、器壁も厚いが「コ」字状口縁が崩れた段階の壺ではなく、「コ」字状口縁の系譜を引く壺ではないものと思われる。器壁が厚い割には、体部に於けるヘラ削りも丁寧なものであり、全体的に造りは良い。この壺と壺Ⅱ類からでは編年的な位置付けは難しいが、第12号住より新しい段階であることは間違いないだろう。壺の底径が小さくなり、口径との比が0.48である点や口縁部の造り等を考慮すると10世紀の前半、第1四半期頃に位置付けられるものと思われるが、通常の壺とは異なるため、今後、千葉県、茨城県方面との関係からも検討していかなければならない問題であろう。壺、壺Ⅱ類とも類例に乏しく、その位置付けについては、推定に頼らざるを得ない。

第11号住居跡からは、壺Ⅱ類と羽釜Ⅰ類が出土している。羽釜について既に諸氏の見解がある。坂本和俊氏（坂本 1973）は羽釜出現期を11世紀前半としているが、後に訂正している（坂本 1976）、高橋一夫氏は9世紀後半（高橋 1975）、市川修氏は10世紀前半（市川 1977）、中村倉司氏は文脈からすると11世紀代にその出現期を求めていた（中村 1980）。また、中島宏氏は清水谷遺跡（中島 1981）で市川氏の説を追認している。筆者も羽釜の出現期を10世紀代と考えるものであり、羽釜の口縁部が内傾するものから直立し、外反していくものであるとすれば、第11号住出土羽釜は11世紀前半に位置付けられると考えるものである。胴部が直線的となり、口縁部が立つ羽釜は、清里・陣場遺跡（中沢 1981）の第32号住、第54号住から出土している。これ等は第12号住出土羽釜とは器形が異なるが、近しい段階に位置付けられるものと思われる。また、壺Ⅱ類は

口縁端部が平坦となり、第12号住出土甕（図示し得なかった）の系譜上にあるものと思われるが、類例に乏しいものである。甕Ⅳ類としたものは、内面の二箇所に窪みがみられ、甕としての可能性が高いものと思われる。

以上、類例に乏しく、推定に頼らざるを得ないが、第12号住を9世紀の第3四半期後半に、第10号住を10世紀の第1四半期に、第11号住を11世紀の第1四半期頃に位置付けておきたい。今後、類例の増加に伴って、大山遺跡周辺の地域性が明らかになるにつれて、再考する必要が生じよう。

（金子 直行）

引用・参考文献

- 青木 義脩 1966 「浦和市白銀発見の須恵器と土師器」『埼玉考古』4
- 青木 義脩 1982 「馬場（小室山）遺跡」浦和市東部遺跡群発掘調査報告書 第1集
- 秋山 道生 1979 「恋ヶ窪遺跡調査報告 1」
- 秋山 道生 1980 「連弧文土器に關して」『恋ヶ窪遺跡調査報告 1』
- 安孫子昭二 1974 「貫井南」
- 安孫子昭二 1978 「勘坂遺跡」
- 有吉 重藏 1962 「関東地方における9世紀代の須恵器と瓦。一埼玉県入間市八坂前窯跡・同新久窯跡中心として」
- 石井 寛 1977 「縄文時代における集団移動と地域組織」『調査研究集録』2
- 市川 修 1977 「田中前遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書 第32集
- 井上 唯雄 1979 「寺内遺跡 特集・火山堆積物と遺跡 1」『考古学ジャーナル』No.157
- 井上 唯雄・都丸 雄 1979 「保渡田遺跡 特集・火山灰堆積物と遺跡 1」『考古学ジャーナル』No.157
- 梅沢太久夫・石岡憲雄・浅野晴樹 1981 「六反田遺跡」
- 浦和市史編さん室 1974 「浦和市史」 第一巻 考古資料編
- 大塚 初重・坂本明美 1959 「埼玉県白銀遺跡の須恵器」『駿台史学』6
- 岡崎 文喜 1972 「海老ヶ貝塚」
- 岡崎 文喜 1981 「磯花遺跡」
- 岡本 孝之 1977 「尾崎遺跡」神奈川県埋蔵文化財調査報告 13
- 小川 良祐・高橋一夫 1974 「前内出窯跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡発掘調査報告 第24集
- 小野 安司 1982 「日野原遺跡」
- 金井塙良一 1968 「番清水遺跡」
- 神奈川考古同人会 1981 「調査中期後半の諸問題ーとくに加曾利B式と曾利式土器との関係についてー」
『神奈川考古』11
- 可見 通宏 1969 「住居の廃絶と土器の廃棄」『多摩ニュータウン遺跡調査報告書』
- 金子 智江 1978 「秩父山遺跡」 上尾市文化財調査報告 第5集
- 金子 真土 1982 「埼玉における古代商業の発達(4)」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』4
- 神村 透 1980 「下伊那地方の縄文中期後半の櫛目一住居跡を中心にしてー」『日本民俗文化とその周辺』
- 紀野 自由 1978 「二宮遺跡」 秋川市文化財調査報告書 第5集
- 桐生 直彦 1981 「連弧文土器」『縄文文化の研究』4
- 桐原 健 1976 「床面浮上土器の取扱いについて」『信濃』28-8
- 国平 錦三 1981、1982 「相模国の奈良・平安時代集落構造(上・中)」『神奈川考古』12、13
- 熊野 正也 1969 「今島田遺跡」
- 栗原 文蔵 1972 「水深」
- 栗原 文蔵・野部徳秋 1973 「岩の上・雉子山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第1集
- 栗原 文蔵・小川良祐 1980 「埼玉越荷山古墳」
- 河野 実 1972 「鷺川遺跡群 J地点」
- 河野 審映 1976 「厚木市鳶尾遺跡出土の土器編年試論ー歴史時代を中心としてー」『神奈川考古』1
- 小久保 徹 1979 「下田・諫訪」 埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書 第21集
- 小林 和男 1978 「火上遺跡 第Ⅳ次調査」 日野市遺跡調査会年報 1
- 小林 達雄 1965 「米島貝塚」 埼玉県庄和町教育委員会
- 小林 達雄 1974 「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』93
- 小林 敏夫 1976 「十三宝塚遺跡第74号住居址」『まえあし』21
- 小林 敏夫 1979 「島海戸遺跡 特集・火山堆積物と遺跡 1」『考古学ジャーナル』No.157

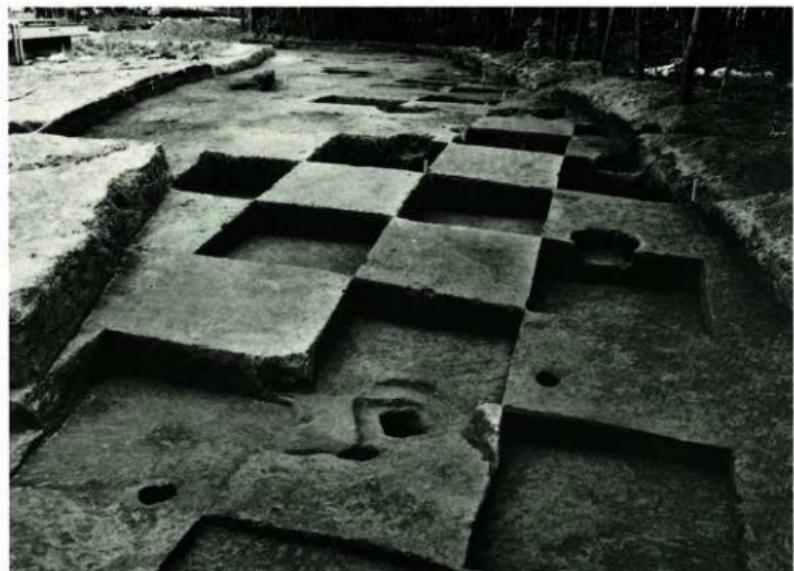
- 駒宮 史朗・坂本和俊 1973 「枇杷橋遺跡発掘調査報告書」 埼玉県遺跡調査会報告 第20集
- 斎木 勝 1978 「千葉市荒屋敷貝塚」
- 埼玉県さきたま資料館 1975 「天王山・梅塚古墳他周辺発掘調査概要」 資料館報 №6
- 埼玉大学 1967 「本村遺跡第一次発掘調査報告」
- 斎藤 国男 1981 「埼玉県における猿名山二ツ岳噴出火山灰を堆積する遺跡について」『埼玉考古』 20
- 坂詰 秀一 1965 「新座」
- 坂詰 秀一 1971 「武藏新久猿跡」
- 坂詰 秀一 1981 「武藏八坂猿跡」
- 坂本 和俊 1976 「大御堂下・女堀遺跡発掘調査報告」 埼玉県遺跡調査会報告 第28集
- 桜井 清彦 1975 「堂ヶ谷戸遺跡」「世田谷区史料」 8
- 佐々木 勝 1980 「西田遺跡」岩手県文化財調査報告書 第51集
- 佐々木保俊 1976 「池田遺跡発掘調査報告書」 新座市埋蔵文化財報告 第1集
- 佐々木保俊 1979 「針ヶ谷遺跡群 1」富士見市遺跡調査会調査報告 第6集
- 笠森 健一 1976 「志久遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告 第31集
- 笠森 健一・柿沼幹夫 1977 「前島・島之上・出口・芝山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第12集
- 佐藤 忠雄・斎藤国夫 1978 「後藤沢遺跡群の調査」
- 寺社下 博 1981 「鎌塚古墳」昭和55年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
- 渋谷 文雄 1982 「堅穴住居跡の柱穴位置と規模について—原始住居復原の一考察—」『考古学雑誌』 67-4
- 白石 浩之 1977 「当麻遺跡・上依知遺跡」神奈川県埋蔵文化財調査報告 12
- 白石 浩之 1978 「加曾利E式土器の変遷」『考古学研究』 第25-1
- 新藤 康夫 1975 「下寺田・要石」
- 新藤 康夫 1975 「中山谷」小金井市文化財調査報告 1
- 新藤 康夫 1976 「門田遺跡群 1978年度調査概報」
- 新藤 康夫 1976 「加曾利E式土器細分の再検討」『考古学雑誌』 62-3
- 新藤 康夫 1982 「神谷原 1」
- 末木 健 1975 「縄文時代中期の土器廢棄について」『史蹟』 5
- 末木 健 1975 「山梨県中央道報告書—北巨摩郡長坂・明野・並崎地内—」
- 末木 健 1977 「縄文時代中期土器廢棄の再検討」『考古学ジャーナル』 №133
- 末木 健 1981 「曾利E式土器」『縄文文化の研究』 4
- 鈴木 敏昭 1982 「下南原」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第8集
- 関根 孝夫 1978 「子和清水貝塚・遺物図版編 1」 松戸市文化財調査報告 第8集
- 高橋 一夫 1975 「国分期土器の細分・編年試論」『埼玉考古』 13・14
- 高林 均 1974 「平山橋遺跡」
- 谷井 鮎 1973 「坂東山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第2集
- 谷井 鮎 1973 「山田遺跡・相模原遺跡発掘調査報告」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第18集
- 谷井 鮎 1974 「南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第3集
- 谷井 鮎・今泉泰之・野部恵秋 1974 「田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第5集
- 谷井 鮎 1976 「鶴ヶ丘」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第8集
- 谷井 鮎 1978 「加曾利E式土器の覺書」「紀要」 5
- 谷井 鮎・中島利治・今泉泰之 1979 「大山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第23集
- 谷井 鮎 1980 「舟山遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査報告書 第9集
- 田部井 功・高橋俊男 1982 「袋・台遺跡」 吹上町埋蔵文化財調査報告書
- 寺田 良喜 1979 「八幡山遺跡」
- 利根川章彦 1981 「倉林後遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第3集

- 利根川章彦 1982 「古墳時代集落構成の一考察—鬼玉地方の5~8世紀の集落群の動態と土師器の変遷を中心として—」『土曜考古』 5
- 中沢 哲 1981 「清里・陣場遺跡」
- 長崎 元広 1980 「縄文集落研究の系譜と展望」『鞍台史学』 50
- 中島 利治 1974 「下新田遺跡・荒神筋遺跡・熊野遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告 第22集
- 中島 宏 1981 「清水谷・安光寺・北坂」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第1集
- 中村 倉司 1979 「宇佐久保遺跡」埼玉県遺跡調査会報告 第38集
- 中村 倉司 1980 「飛龍神社前遺跡」埼玉県遺跡調査会報告 第39集
- 中村 倉司 1980 「臺遺跡」埼玉県遺跡調査会報告 第41集
- 並木 隆 1978 「木曾呂表遺跡」川口市文化財調査報告書 第9集
- 日本考古学協会 1981 「北関東を中心とする縄文中期の諸問題」シンポジウム 1 <資料>
- 丹羽 篤一 1978 「縄文時代中期における集落の空間構成と集団の諸関係」『史林』 61-2
- 能登 健 1975 「縄文文化解明における地域研究のあり方—関東地方加曾利E式土器を中心として—」『信濃』 27-4
- 野中 松夫 1980 「八番遺跡」蓮田市文化財調査報告書 第1集
- 野部 徳秋 1977 「末野窯址(花園支群)発掘調査」文化財報告 第2集
- 野本 孝明 1980 「鍋島園内遺跡」太田区の埋蔵文化財 1
- 橋本 正 1976 「堅穴住居の分類と系譜」『考古学研究』 23-2
- 服部 敬史・福田健司 1979 「南多摩窯址群出土の須恵器とその編年」『神奈川考古』 6
- 服部 敬史・福田健司 1981 「南多摩窯址群における須恵器編年再考」『神奈川考古』 12
- 服部 敬史 1981 「平安時代の土器・陶器—各地域の諸様相と今後の課題—」シンポジウム発表要旨
- 早川 智明 1962 「南中丸」
- 樋口 升一 1972 「土器房業に関する一問題—とくに「吹上バターン」を中心として—」『信濃』 24-2
- 平野 進一・大江正行 1981 「八幡原A・B、上籠、元鳥名A」関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集
- 本庄市史編集室 1976 「本庄市史 資料編」
- 松本 富雄 1981 「新開遺跡」
- 水沢 裕子 1979 「松原遺跡」
- 宮 昌之 1982 「上南原」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第10集
- 宮崎 朝雄 1972 「加倉、西原、馬込、平林寺」埼玉県遺跡調査会報告 第14集
- 宮崎 朝雄 1976 「黒谷田端前遺跡」
- 宮崎 朝雄 1979 「加曾利E式土器について」奈和 17
- 宮崎 朝雄 1982 「増善寺遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第5集
- 八幡 一郎 1976 「信濃大深山遺跡」
- 山内 清男 1940 「第12輯 加曾利E式」『日本先史土器図譜』
- 山本 謙久 1978 「縄文中期における住居跡内一括遺存土器群の性格」『神奈川考古』 3
- 山田 義高 1982 「扇山遺跡」
- 横川 好富 1974 「駒岡」埼玉県遺跡発掘調査報告書 第4集

図 版



調査区東側全景



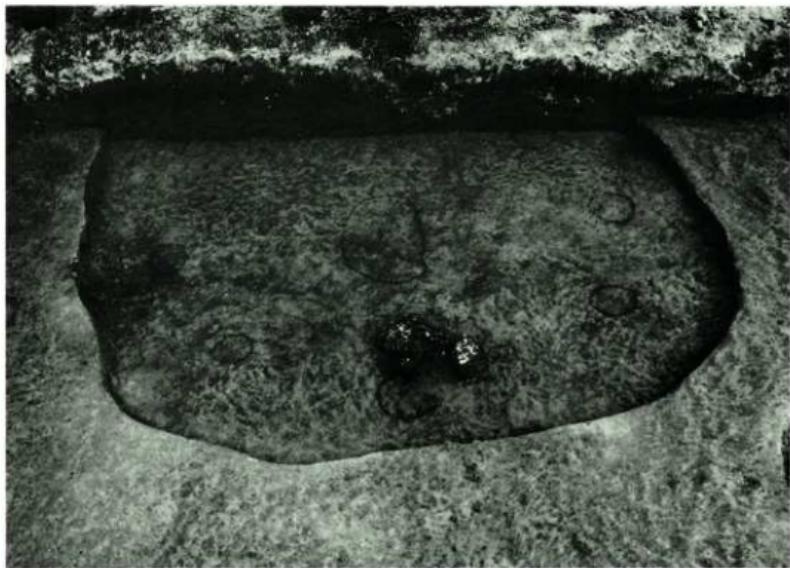
調査区西側全景



第1号住居跡



第1号住居跡遺物出土状況



第 2 号住居跡



第 2 号住居跡炉



第3号住居跡



第3号住居跡炉



第3号住居跡炉セクション



第3号住居跡P12遺物出土状況



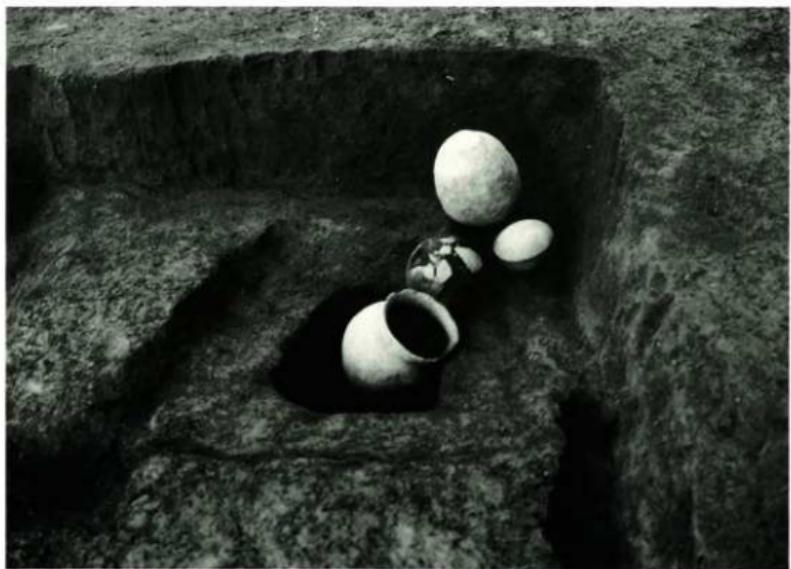
第5号住居跡



第13号住居跡



第 6 号住居跡



第 6 号住居跡遺物出土状況



第 7 号住居跡



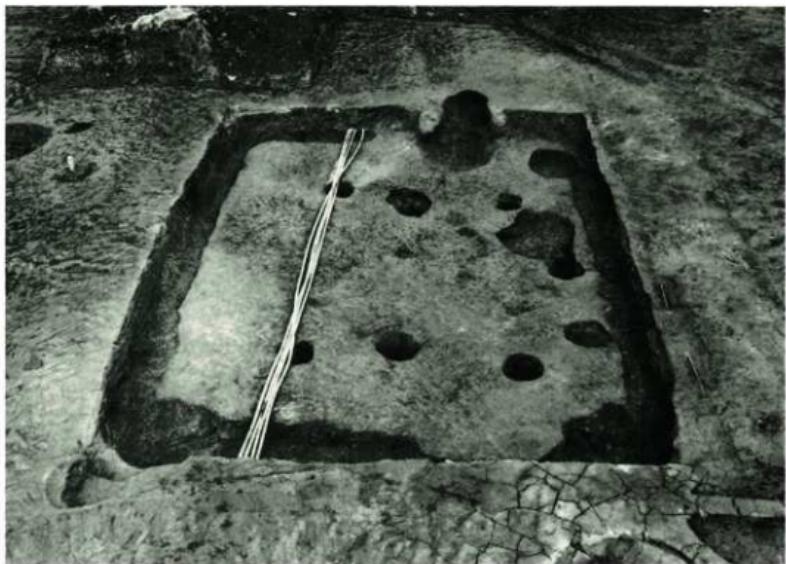
第 1 号土壤遺物出土状況



第8号住居跡



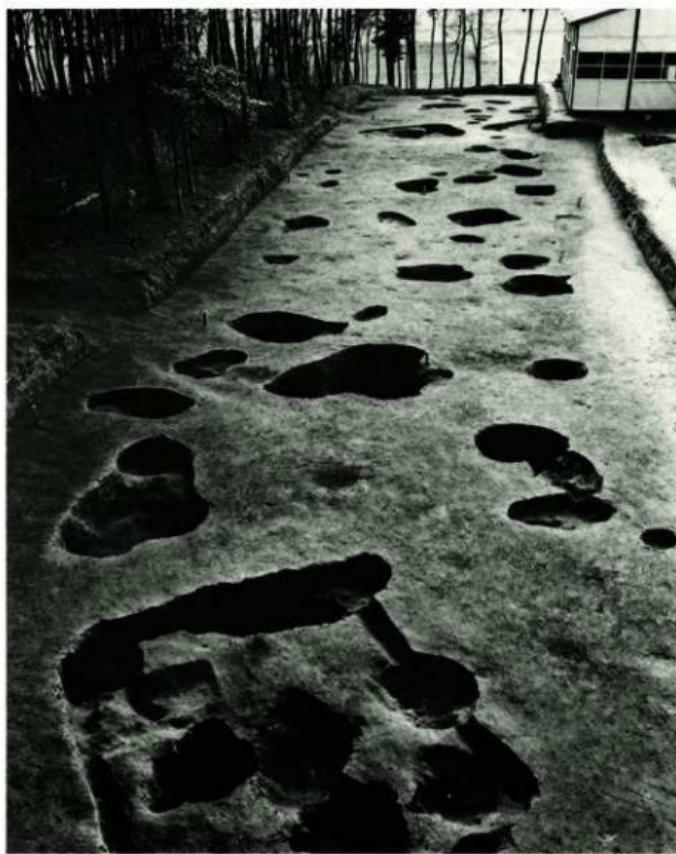
第10号住居跡



第12号住居跡



第12号住居跡カマド



調査区西側土壤群



拡張区土壤群(1)



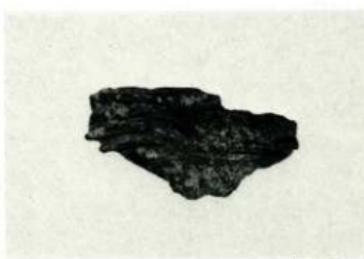
拡張区土壤群(2)



第10図－3



第10図－1



第10図－2



第10図－4



第10図－5

第1号住居出土土器



第16図-1



第2号住居跡出土土器

第16図-2



第16図-3



第2号住居跡出土土器

第16図-5



第16図-7



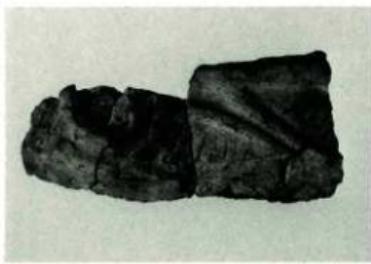
第16図-8



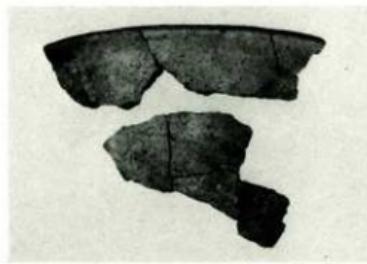
第16図-4



第16図-6



第17図-1



第17図-2

第2号住居跡出土土器



第25図-3



第3号住居跡出土土器

第25図-5



第25図-8

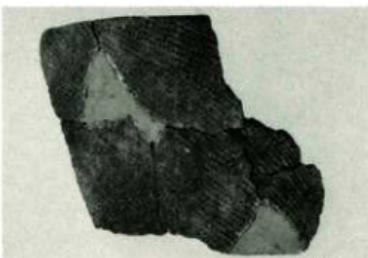


第3号住居跡出土土器

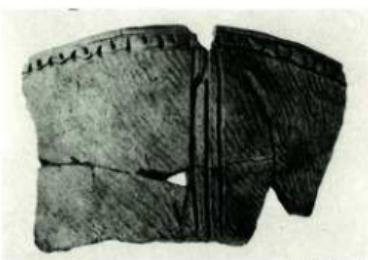
第25図-1



第25図-9



第25図-4



第25図-2



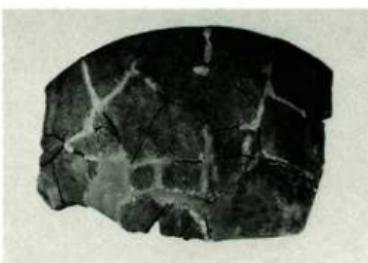
第25図-6



第25図-7



第24図-1



第24図-3

第3号住居跡出土土器



第34図-1



第40図-1



第40図-2



第40図-3



第40図-4

第5・6号住居跡出土土器



第48図-1



第48図-2



第48図-3



第50図-1



第50図-2



第50図-3



第50図-4



第54図-1



第54図－2



第54図－3



第54図－4



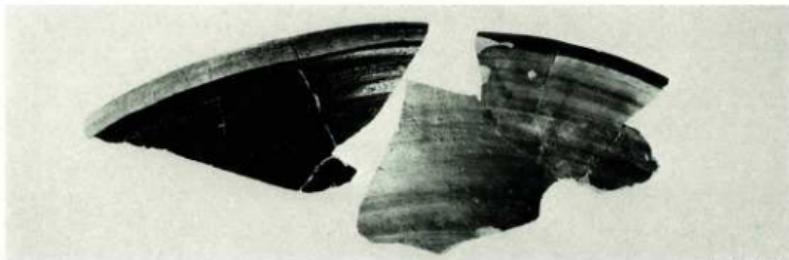
第54図－5



第54図－6

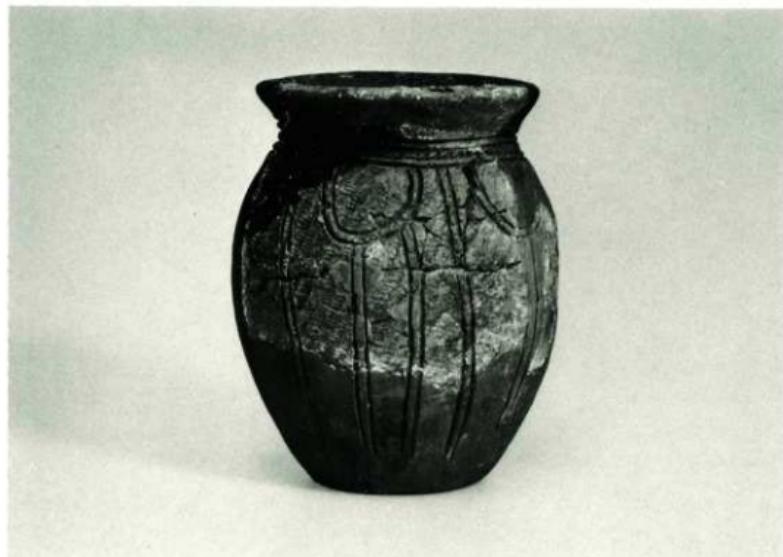


第54図－7



第12号住居跡出土土器

第54図－13

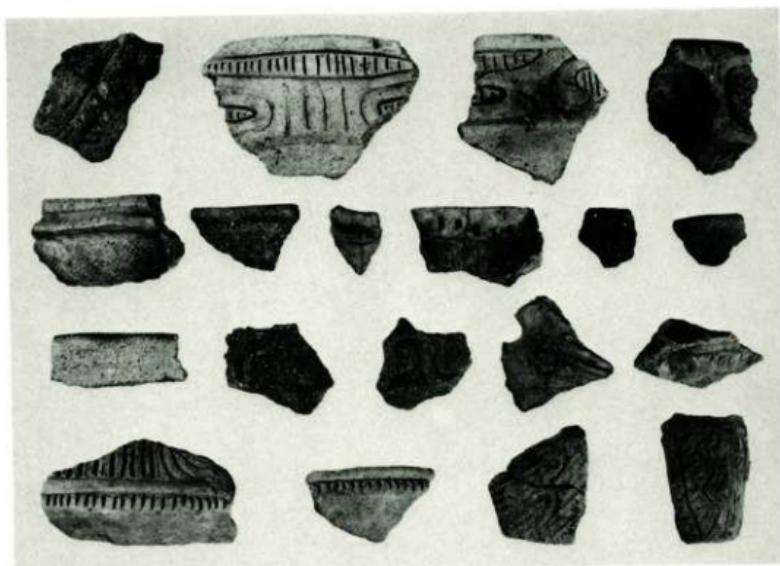


第59図-1

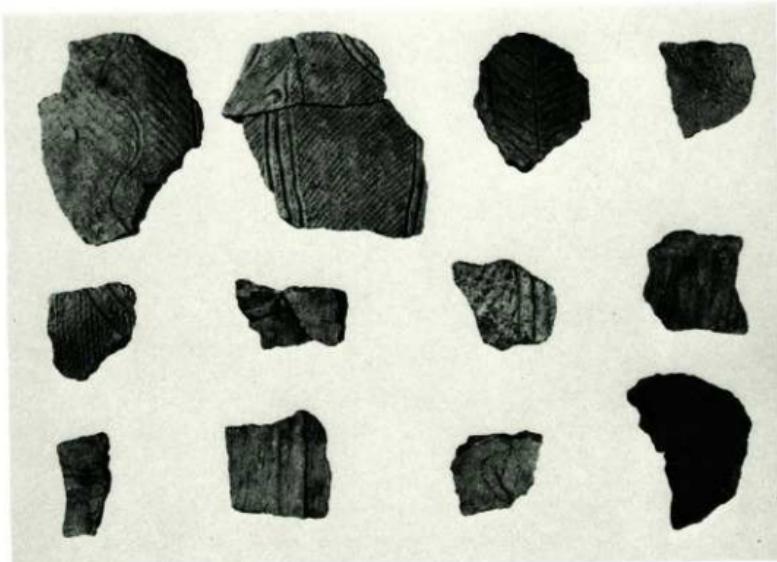


第1号土壙出土土器

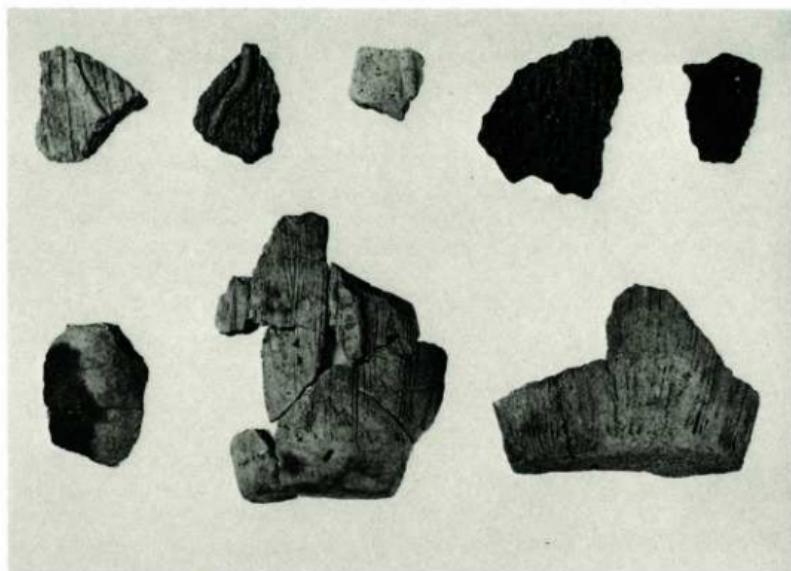
第59図-2



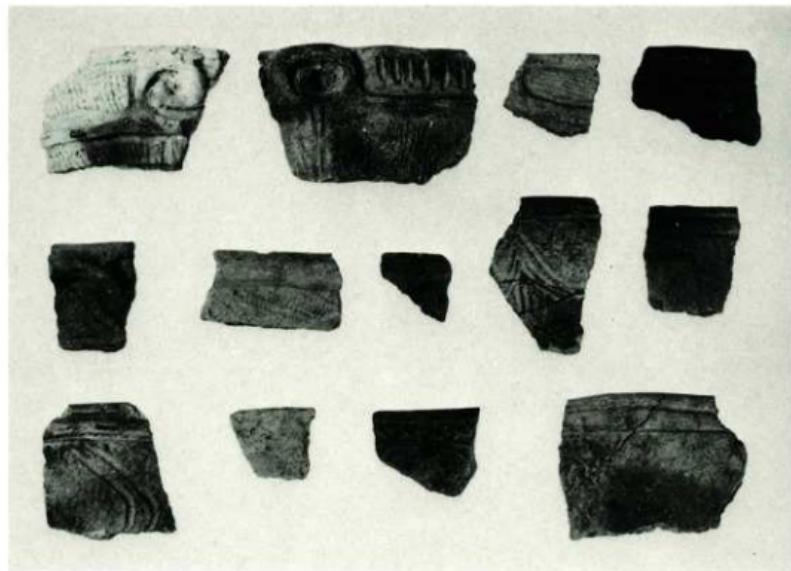
第1号住居跡出土土器



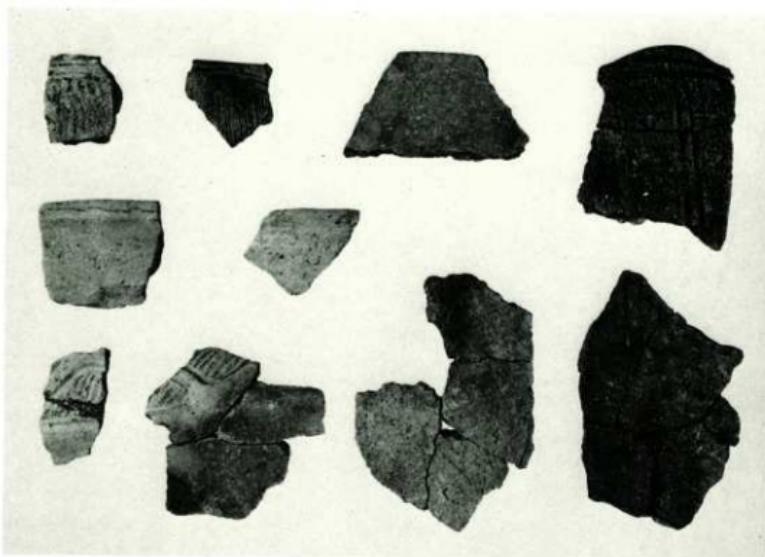
第1号住居跡出土土器



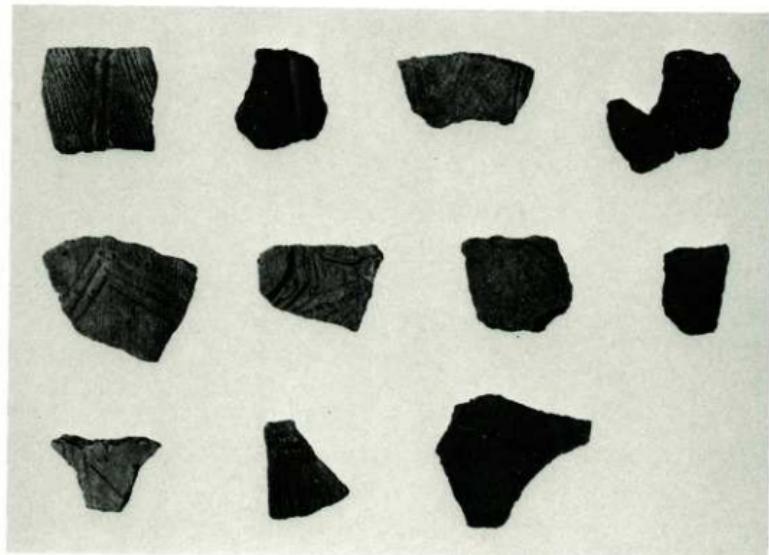
第1号住居跡出土土器



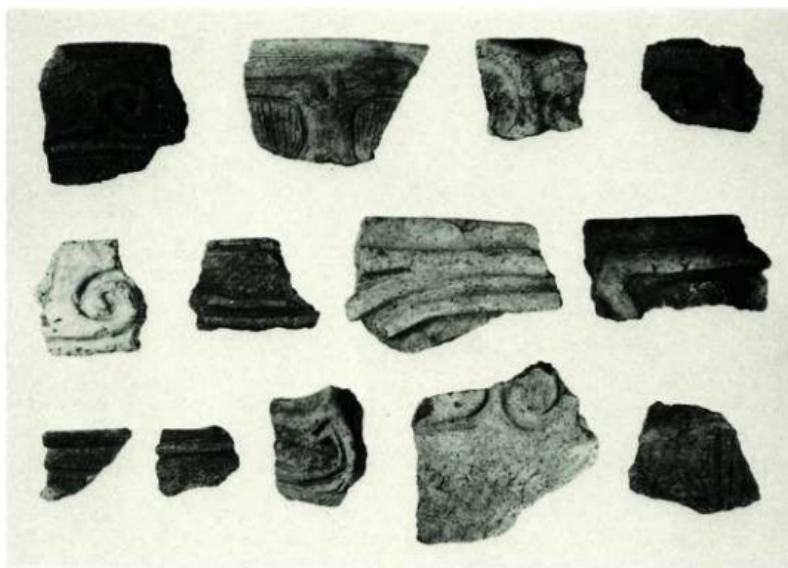
第2号住居跡出土土器



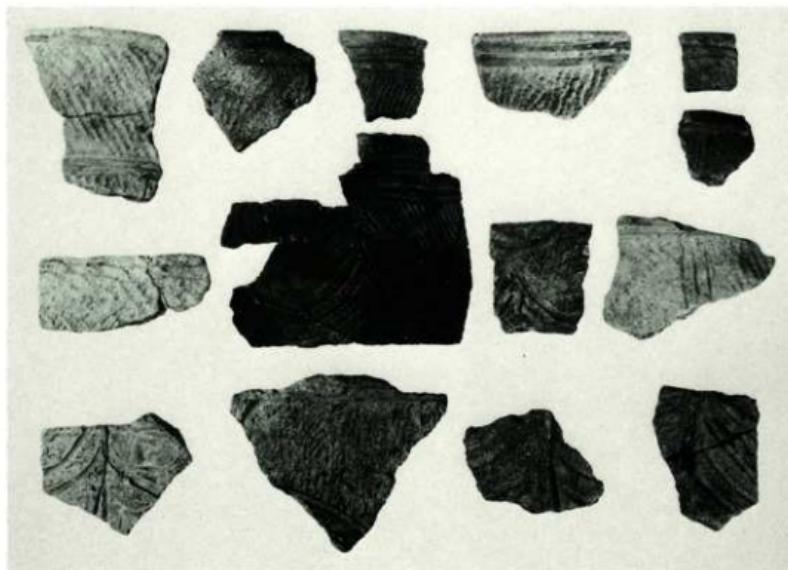
第2号住居跡出土土器



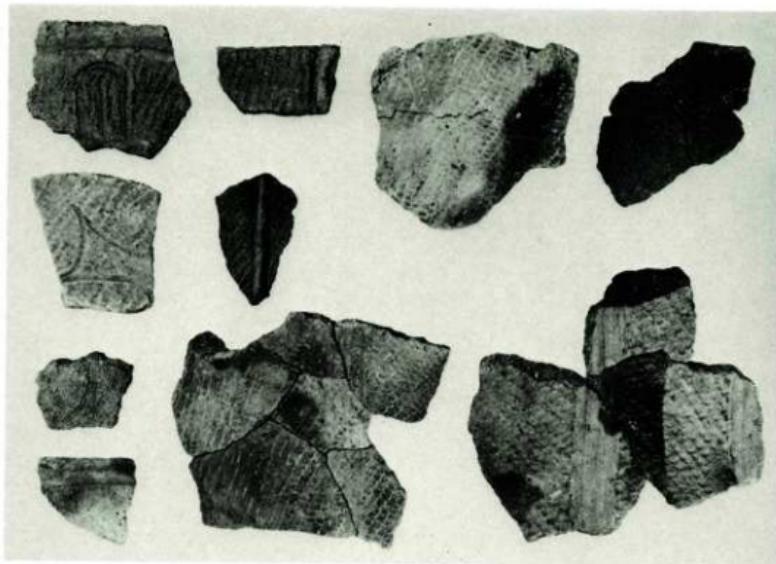
第2号住居跡出土土器



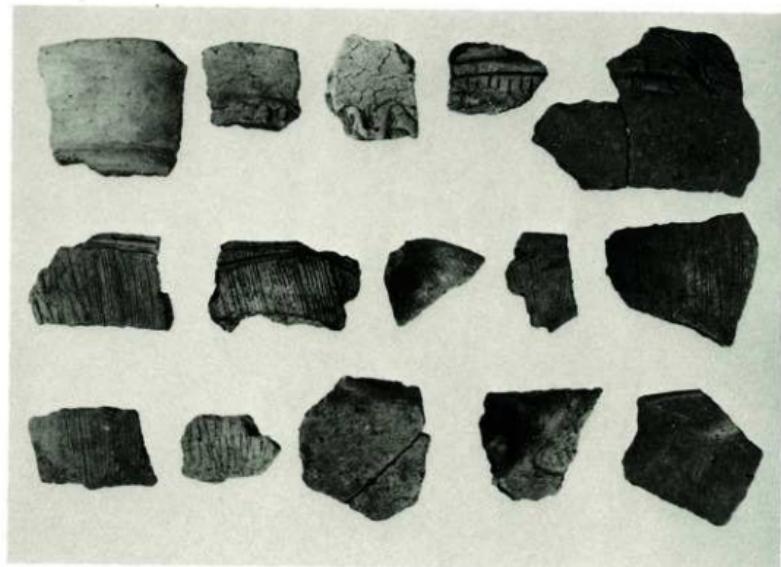
第3号住居跡出土土器



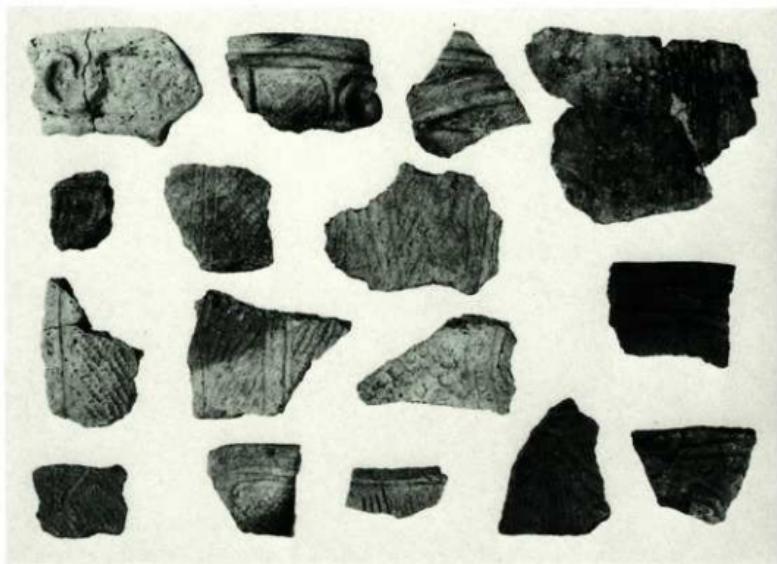
第3号住居跡出土土器



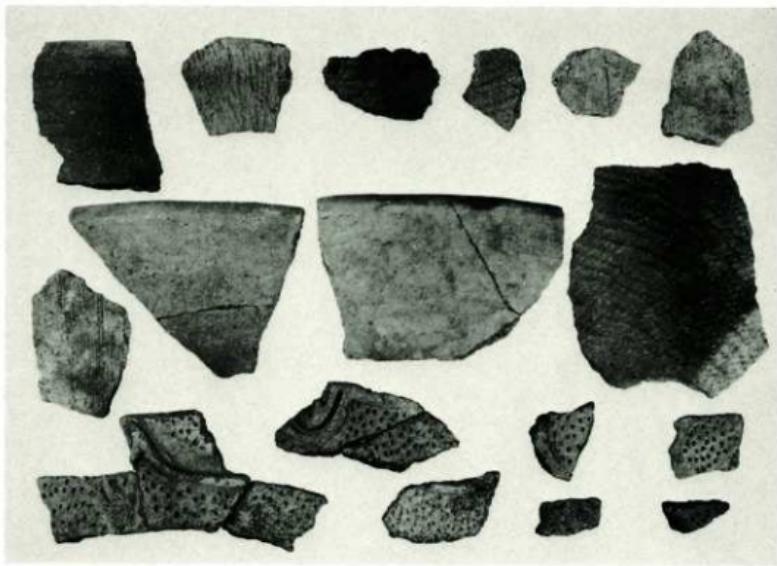
第3号住居跡出土土器



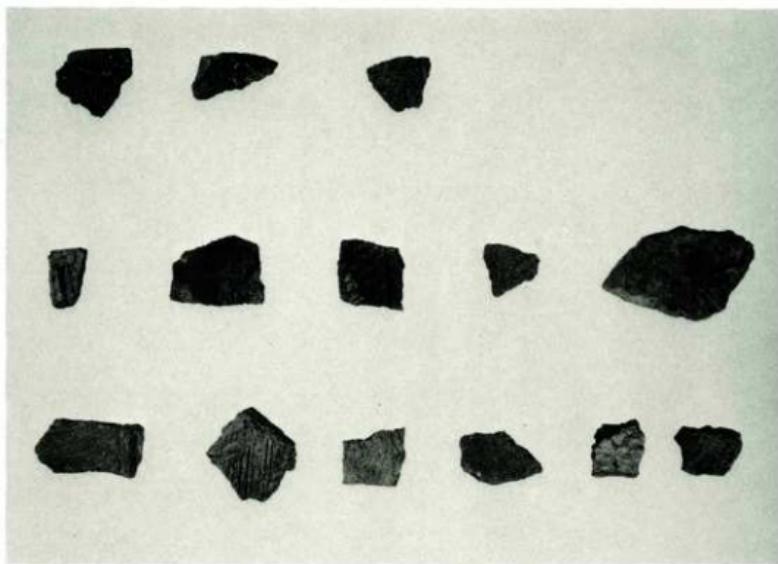
第3号住居跡出土土器



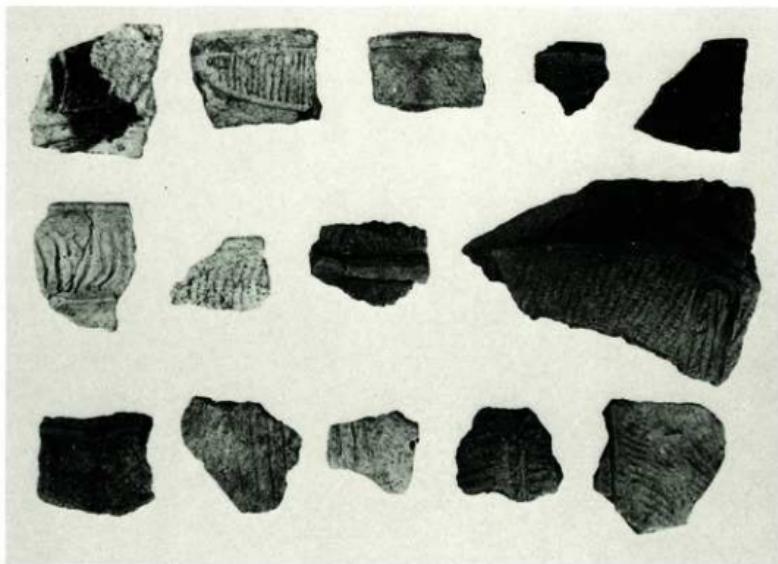
第5号住居跡出土土器



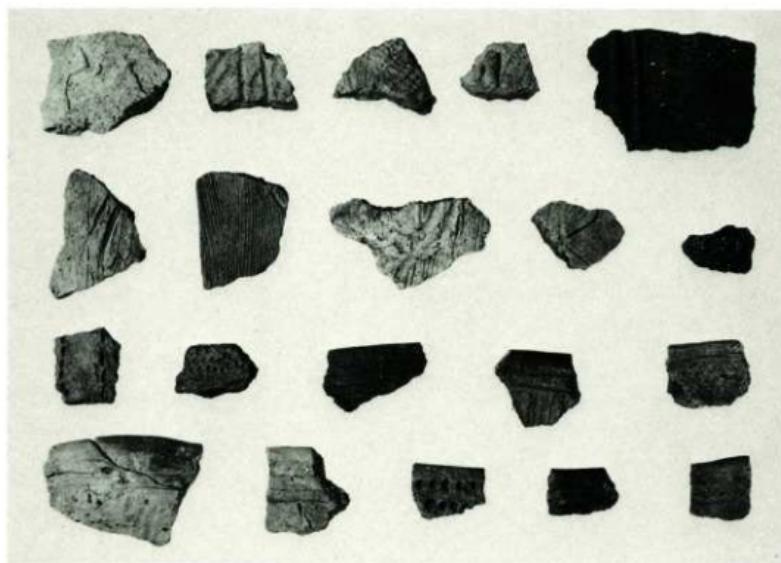
第5号住居跡出土土器



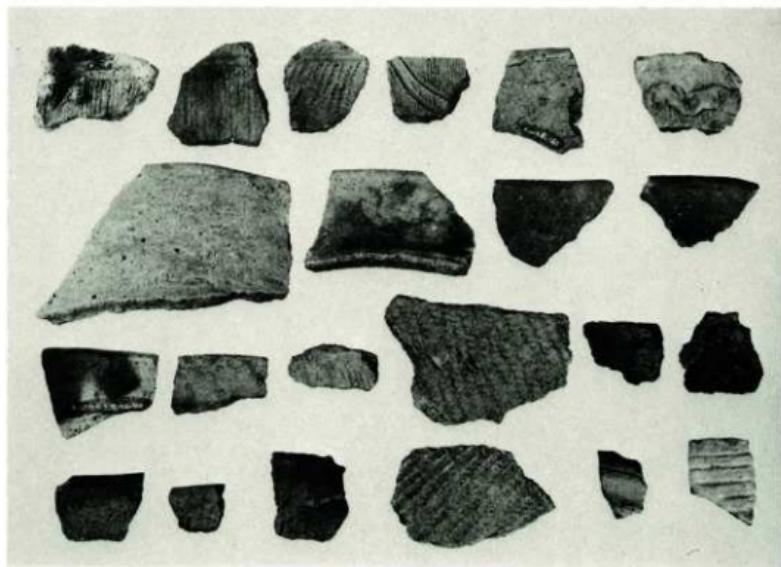
第4・13号住居跡出土土器



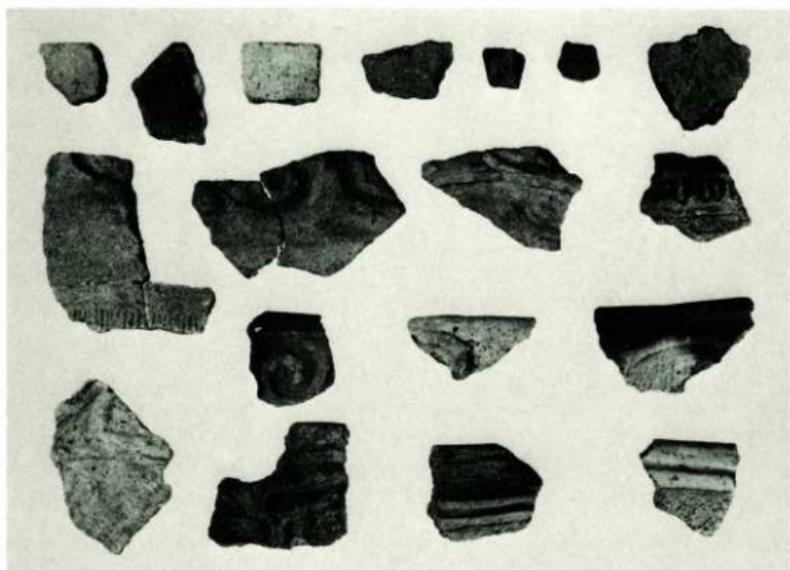
土壤出土土器(1)



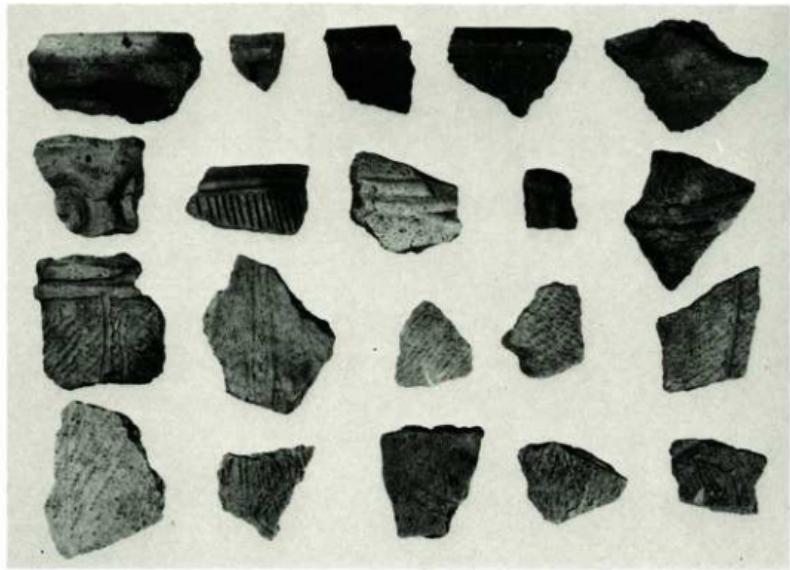
土壤出土土器(2)



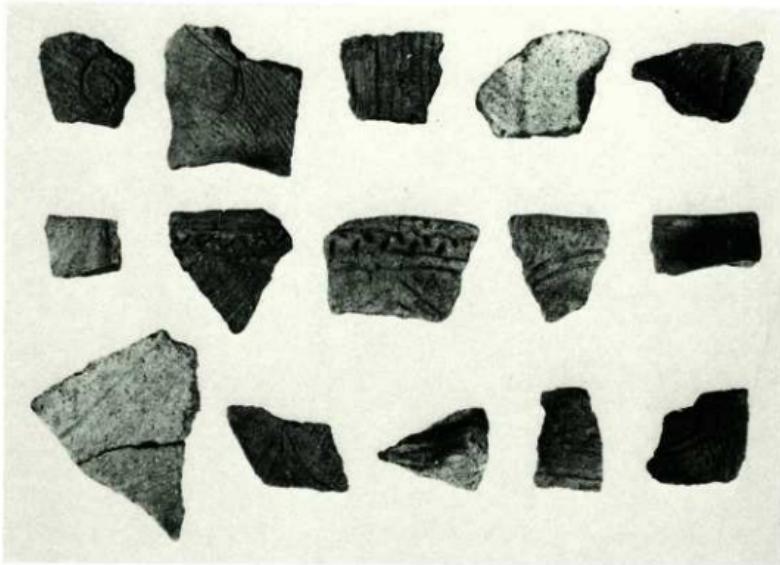
土壤出土土器(3)



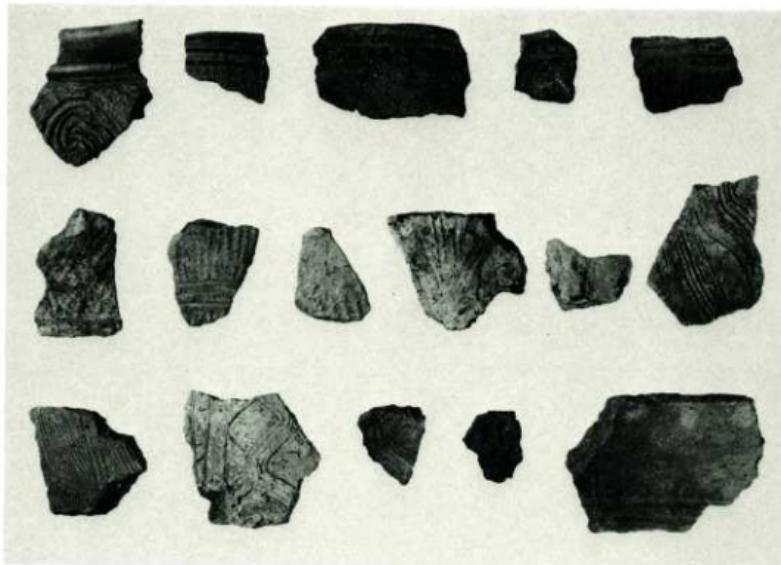
グリッド出土土器(1)



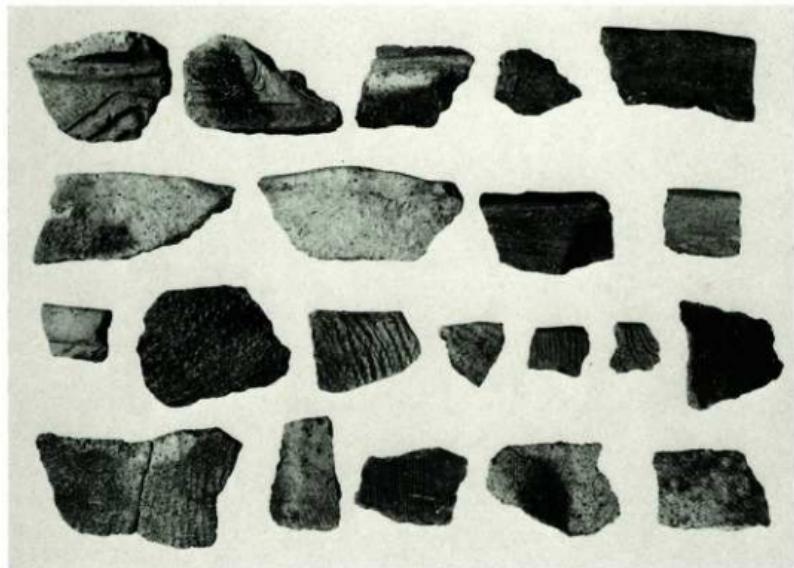
グリッド出土土器(2)



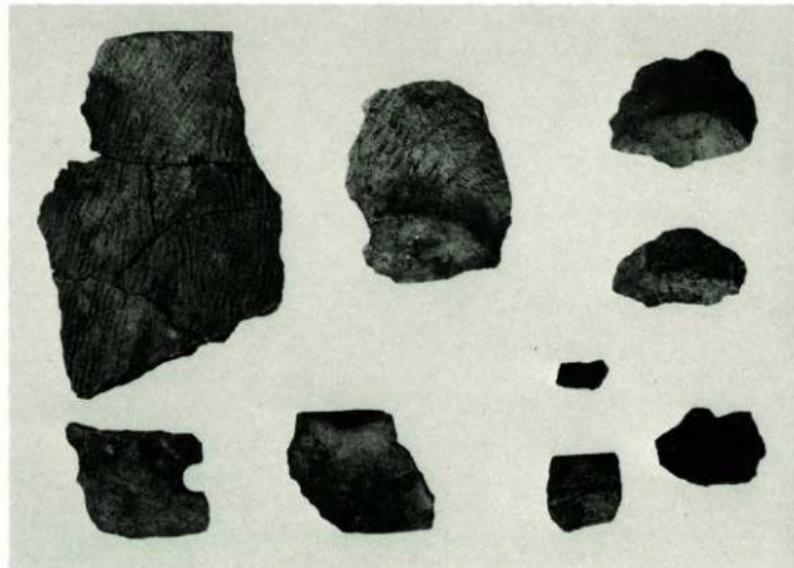
グリッド出土土器(3)



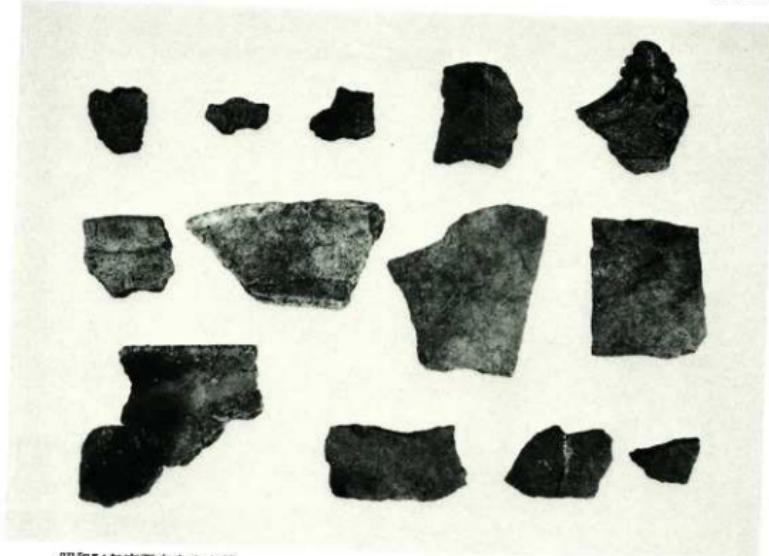
グリッド出土土器(4)



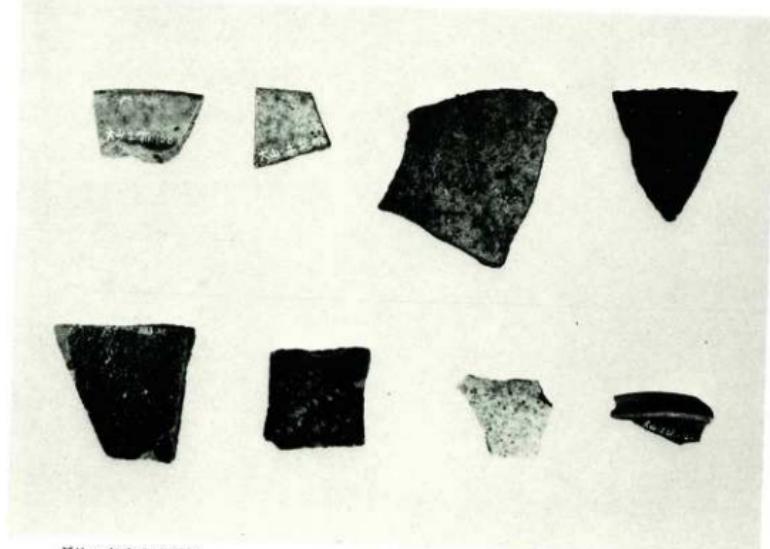
グリッド出土土器(5)



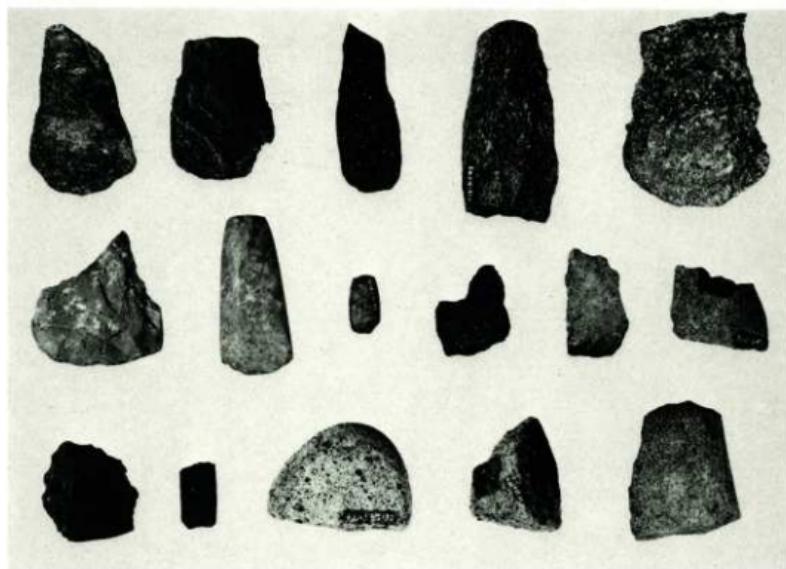
グリッド出土土器(6)



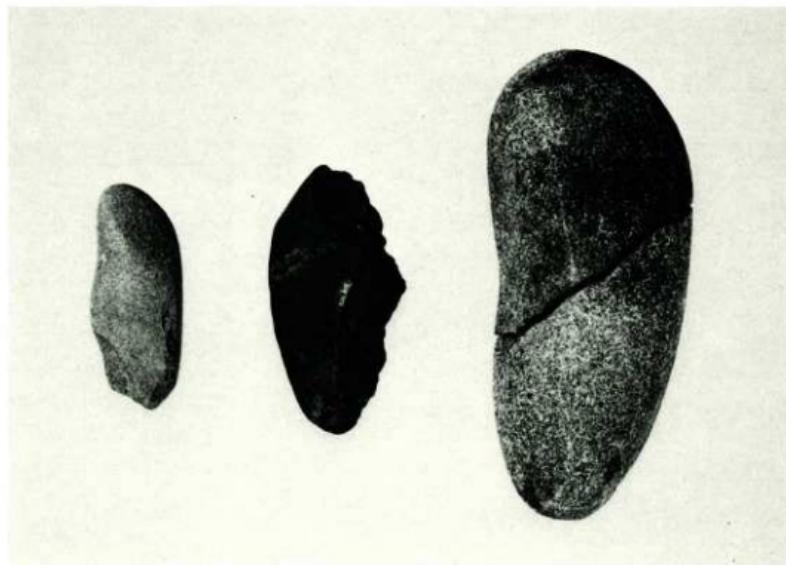
昭和54年度調査出土土器



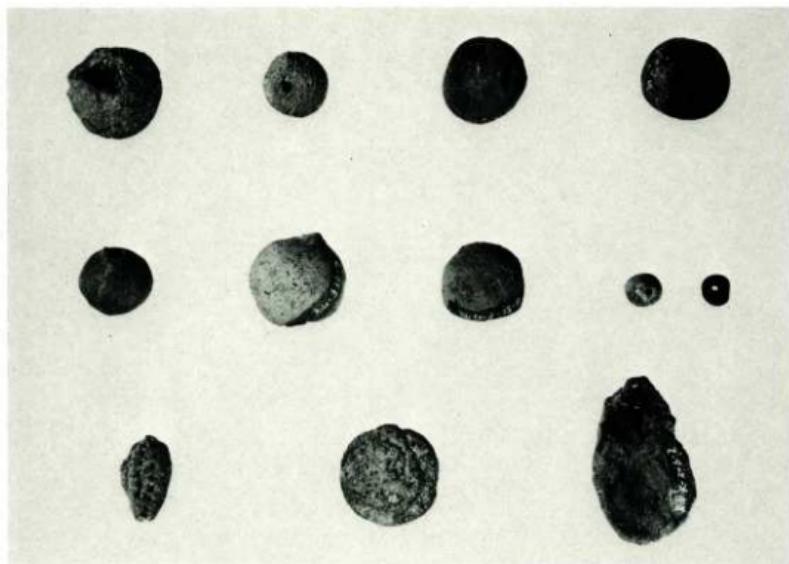
グリッド出土土器(7)



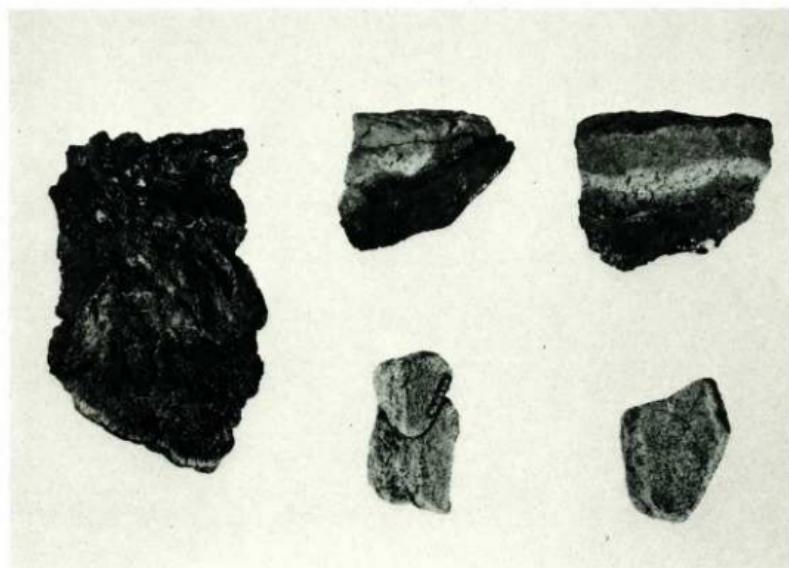
石器(1)



石器(2)



土製品(1)



土製品(2)

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第17集

県立ガンセンター関係 昭和56年度
埋蔵文化財発掘調査報告

大 山

昭和57年9月20日 印刷
昭和57年9月31日 発行

発行 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
印刷 株式会社 誠美堂印刷所